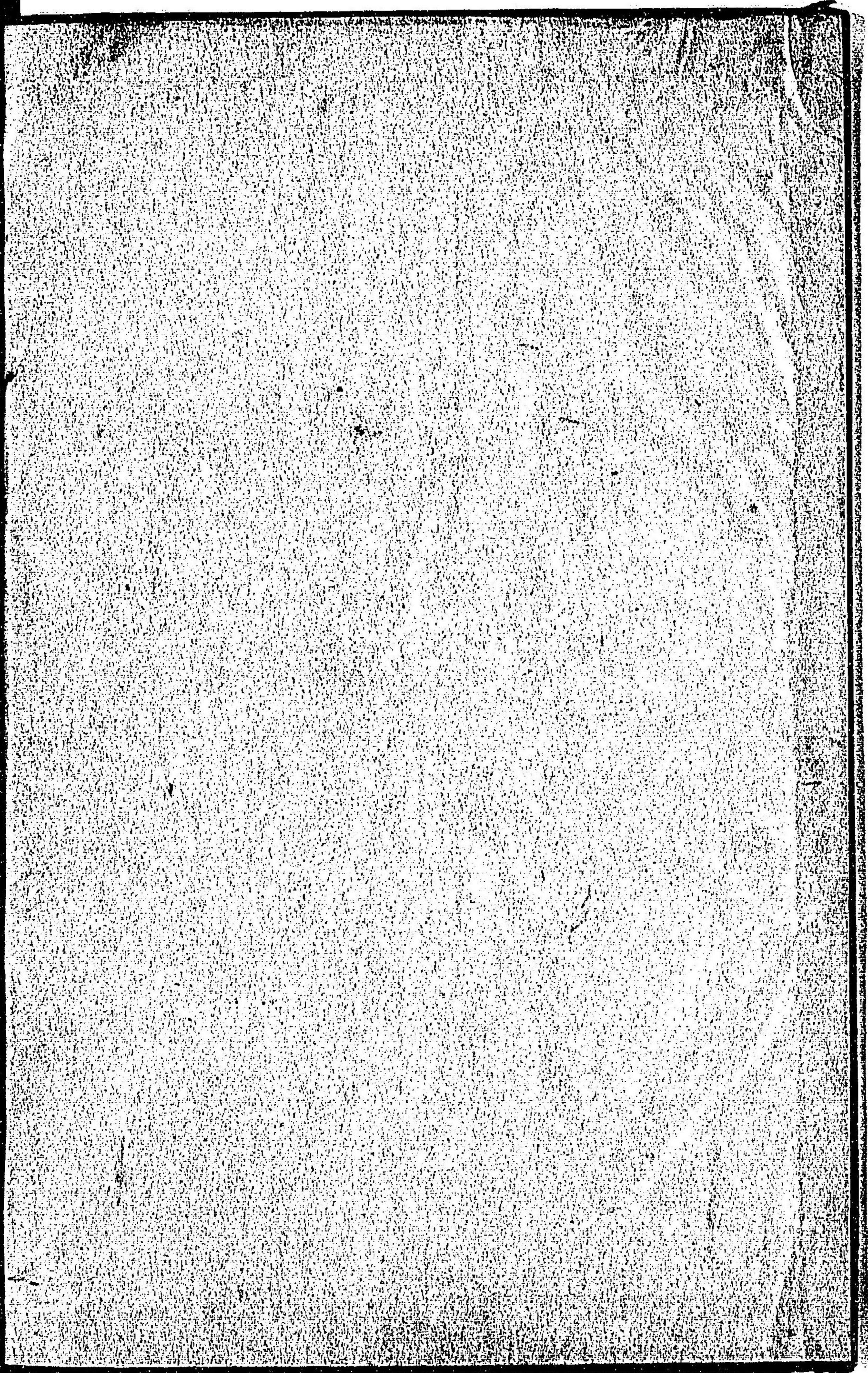
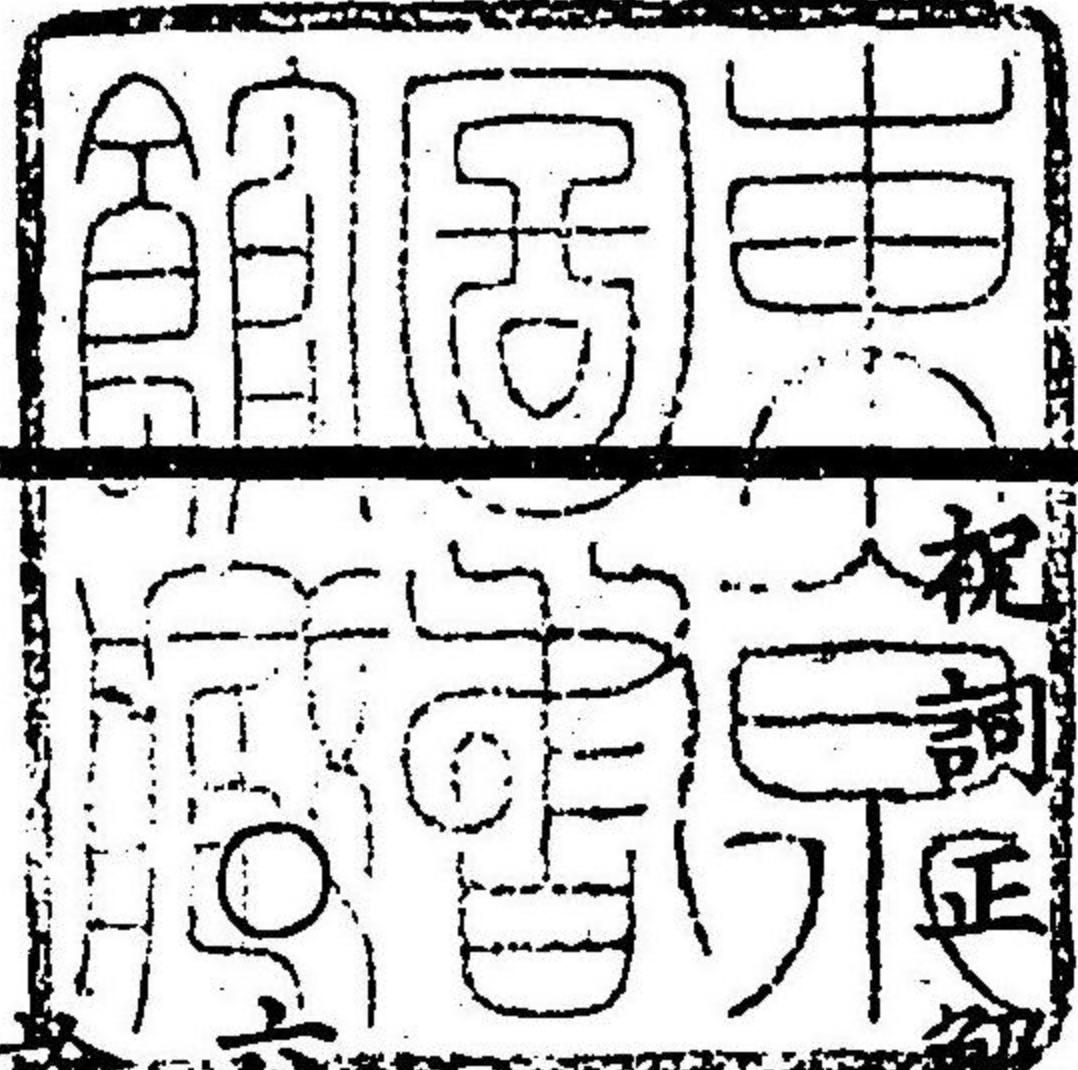


詞正解 下



東泉齋					
二	四	一	七		
冊	號	架	西	屬	類





祝詞正解下之卷

下總 青柳高鞠 著

六月晦大被十二月 太政官式。凡六月十二月晦日。於宮城南路大被。大臣以下五位以上就朱雀門。辨史各一人。率中務式部兵部等省中見参。人数百官男女。悉合被之とあり。此被を。六月十二月の晦日に行はる。正月朔日より六月まで犯せし罪穢を。六月晦日解除スし給ふ。七月より十二月の晦日解除し給へる。

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣天皇朝廷尔仕奉留
 比礼挂伴男手襪挂伴男鞞負伴男劔佩伴男伴男乃八十伴男

隱坐^{カクシ}安國^{ヤスクニ}止平^{トクニ}氣所^{キソ}知食^{シノク}武國^{ムクニ}中^{ナカ}成^{ナリ}出武^{イデム}天之^{アメノ}益人^{マスヒト}等^{ラガ}我^ガ過^チ
犯^{オカシ}雜^{クサ}罪^{ノミ}事^{コト}波^ハ天津^{アマツ}罪^{ツミ}止^ト畔^{ハナ}放^{ナシ}溝^{クヅ}埋^{ウマ}樋^ヒ放^{ナシ}頻^{ヒシ}蔣^{マキ}串^{クシ}刺^{サシ}生^{ナシ}剝^{ヒキ}逆^{サカ}剝^{ヒキ}
屎^{カク}戶^コ許^コ許^コ太^タ久^ク乃^ノ罪^{ツミ}乎^ヲ天津^{アマツ}罪^{ツミ}止^ト法^リ別^ワ氣^ケ國^{クニ}津^ツ罪^{ツミ}止^ト生^{ナシ}層^{シロ}斷^タ死^シ膚^{ハダ}
斷^タ白^{シロ}人^{ヒト}胡^コ久^ク美^ミ已^{オノ}母^{ガハ}犯^{オカセル}罪^{ツミ}已^{オノ}子^{ガコ}犯^{オカセル}罪^{ツミ}母^ハ與^ト子^{コト}犯^{オカセル}罪^{ツミ}子^ハ與^ト母^{オカセル}犯^{オカセル}罪^{ツミ}畜^ヲ
犯^{オカセル}罪^{ツミ}昆^ハ虫^シ乃^ノ災^{サヒ}高^{タカ}津^ツ神^{カミ}乃^ノ災^{サヒ}高^{タカ}津^ツ鳥^{トリ}災^{サヒ}畜^ハ仆^ヘ志^シ蠱^{マシ}物^{モノ}為^シ罪^{ツミ}許^コ許^コ太^タ
久^ク乃^ノ罪^{ツミ}出^{イデ}武^ム如^カ此^ク出^{イデ}波^ハ天津^{アマツ}宮^{ミヤ}事^{コト}以^テ爲^シ大^{オホ}中^{ナカ}臣^{トミ}天津^{アマツ}金^{カナ}木^キ乎^ヲ本^{モト}打^{ウチ}
切^キ末^{スエ}打^{ウチ}斷^タ武^ム千^チ座^{クラ}置^{オキ}座^{クラ}足^{タラ}波^ハ志^シ天津^{アマツ}管^{スガ}曾^ソ乎^ヲ本^{モト}刈^{クリ}末^{スエ}刈^{クリ}
氏^テ八^ヤ針^リ取^{トリ}辟^{サキ}氏^テ天津^{アマツ}祝^{イハヒ}詞^{コト}乃^ノ太^{フト}祝^{イハヒ}詞^{コト}事^{コト}乎^ヲ宣^ノ禮^レ如^カ此^ク久^ク乃^ノ良^ラ波^ハ
天津^{アマツ}神^{カミ}波^ハ天^{アメノ}磐^{イハ}門^ト乎^ヲ押^{オシ}披^ヒ氏^テ天^{アメノ}之^ノ八^ヤ重^ヘ雲^{クモ}乎^ヲ伊^イ頭^ツ乃^ノ千^チ別^ワ尔^ニ千^チ別^ワ
氏^テ所^コ聞^ク食^シ武^ム國^{クニ}津^ツ神^{カミ}波^ハ高^{タカ}山^{ヤマ}之^ノ末^{スエ}短^{ヒキ}山^{ヤマ}之^ノ末^{スエ}尔^ニ上^ノ坐^カ氏^テ高^{タカ}山^{ヤマ}之^ノ伊^イ
總理^{ホリ}短^{ヒキ}山^{ヤマ}之^ノ伊^イ總理^{ホリ}乎^ヲ撥^{カキ}別^ワ氏^テ所^コ聞^ク食^シ武^ム如^カ此^ク所^コ聞^ク食^シ武^ム皇^{スメ}御^ミ孫^マ
之^ノ命^{ミコト}乃^ノ朝^{チカド}廷^{テイ}乎^ヲ始^{ハシ}氏^テ天^{アメノ}下^ノ四^シ方^フ國^{クニ}罪^{ツミ}止^ト云^{イフ}布^フ罪^{ツミ}波^ハ不^ラ在^ラ止^ト科^シ戶^ト

之^ノ風^{カゼ}乃^ノ天^{アメノ}之^ノ八^ヤ重^ヘ雲^{クモ}乎^ヲ吹^{フク}放^フ事^{コト}之^ノ如^ク久^ク大^{オホ}津^ツ邊^ヘ尔^ニ居^ル大^{オホ}船^{フネ}乎^ヲ解^{トキ}放^{ナシ}艦^{セナ}解^{トキ}放^{ナシ}氏^テ
風^{カゼ}夕^{ユフ}風^{カゼ}乃^ノ吹^{フク}掃^{ハラフ}事^{コト}之^ノ如^ク久^ク大^{オホ}津^ツ邊^ヘ尔^ニ居^ル大^{オホ}船^{フネ}乎^ヲ解^{トキ}放^{ナシ}艦^{セナ}解^{トキ}放^{ナシ}氏^テ
大海^{オホウミ}原^{ハラ}尔^ニ押^{オシ}放^{ナシ}事^{コト}之^ノ如^ク久^ク彼^{カノ}方^{カタ}之^ノ繁^{シゲ}木^キ本^{モト}乎^ヲ燒^{ヤキ}鑊^{ガマ}乃^ノ敏^シ鑊^{ガマ}以^テ氏^テ打^{ウチ}
掃^{ハラフ}事^{コト}之^ノ如^ク久^ク遺^ル罪^{ツミ}波^ハ不^ラ在^ラ止^ト被^{ハラヒ}給^{タマ}比^ヒ清^{キヨ}給^{タマ}事^{コト}乎^ヲ高^{タカ}山^{ヤマ}之^ノ末^{スエ}短^{ヒキ}山^{ヤマ}之^ノ
末^{スエ}里^リ佐^サ久^ク那^ナ太^タ理^リ尔^ニ落^{オチ}多^タ支^シ都^ツ速^{ハヤ}川^{カハ}能^ノ瀨^セ坐^マ須^ス瀨^セ織^{オリ}津^ツ比^ヒ咩^メ止^ト云^{イフ}
神^{カミ}大^{オホ}海^{ウミ}原^{ハラ}尔^ニ持^{モチ}出^{イデ}武^ム如^カ此^ク持^{モチ}出^{イデ}往^{イナ}波^ハ荒^{アラ}鹽^{シホ}之^ノ鹽^{シホ}乃^ノ八^ヤ百^{ヒャク}道^チ乃^ノ八^ヤ鹽^{シホ}
道^チ之^ノ鹽^{シホ}乃^ノ八^ヤ百^{ヒャク}會^エ尔^ニ座^マ須^ス速^{ハヤ}開^{アキ}都^ツ比^ヒ咩^メ止^ト云^{イフ}神^{カミ}持^{モチ}可^カ吞^{ノミ}年^{トシ}如^カ此^ク
久^ク可^カ吞^{ノミ}波^ハ氣^イ吹^{フク}戶^ト坐^マ須^ス氣^イ吹^{フク}戶^ト主^シ止^ト云^{イフ}神^{カミ}根^ネ國^{クニ}底^{ソコ}之^ノ國^{クニ}尔^ニ氣^イ吹^{フク}
放^{ナシ}年^{トシ}如^カ此^ク氣^イ吹^{フク}放^{ナシ}根^ネ國^{クニ}底^{ソコ}之^ノ國^{クニ}尔^ニ坐^マ速^{ハヤ}佐^サ須^ス良^ラ比^ヒ咩^メ登^ト云^{イフ}神^{カミ}
持^{モチ}佐^サ須^ス良^ラ比^ヒ咩^メ失^シ年^{トシ}如^カ此^ク失^シ波^ハ天^{アメノ}皇^{スメ}我^ガ朝^{チカド}廷^{テイ}尔^ニ仕^{ツカ}奉^{マツル}留^ル官^{ツカサム}官^{ツカサム}人^{ヒト}等^{トモ}
乎^ヲ始^{ハシ}氏^テ天^{アメノ}下^ノ四^シ方^フ波^ハ自^レ今^{イマ}日^ヒ始^{ハシ}罪^{ツミ}止^ト云^{イフ}布^フ罪^{ツミ}波^ハ不^ラ在^ラ止^ト高^{タカ}天^{アメノ}原^{ハラ}
尔^ニ耳^{ミミ}振^{フリ}立^{タテ}聞^ク物^{モノ}止^ト馬^{ウマ}牽^{ヒキ}立^{タテ}氏^テ今^{イマ}年^{トシ}六^ム月^{ツキ}晦^セ日^ヒ夕^{ユフ}日^ヒ之^ノ降^{クダリ}乃^ノ大^{オホ}被^{ハラヒ}尔^ニ

○祝詞正解下

○三

被給比。清給事乎。諸聞食止宣。四國ト部等。大川道尔。持退出也。被却止宣。

高天原尔。神留坐皇親神漏岐神漏美乃命以也。祈年祭の下云。○八百万神等も。數多き至極を云。○神集を賜比神議々賜。神ハ總て神の御上よ附て云。稱辞集ハ。令集よ。集をむるなり。此ハ皇御孫命の天降給ふ時の事よを。委くハ記紀を見べし。○我皇御孫命。我ハ。神祖神の。我と御自躬詔給へるも。○豊葦原乃水穗之國乎安國止平久知所食止事依志奉ハ。上よ出たる所々よ云。○國中ハ。俗よ云。國中の意あり。○荒振神等ハ。制令よ服従む。心のまよ振す。神と云らよ。振ハ。其所為のあり状を云辞あり。○神問志賜。神掃々賜比。神ハ。上の神集の神よ同。問志

ハ。行をゆらし持をまよ。あど云と同格よ。問と云らよ。御制令よ服従ざる神等の許よ。使を遣し。云釋聞せよ。和し給む。和し給むも。尚服従ざるハ。誅伐を加へ神掃よ掃給むと云らよ也。○語問志磐根樹立。草之垣葉乎語止也。大殿祭の下よ云。○天之磐座放。磐座と云。皇御孫命の御座よ。磐と云ハ。御座の堅固あるよ。を以て稱よ。放ちハ。令離るよ。神祖神の詔命をよ。放つよ。○天之八重雲。あらの天ハ。虚空を指たる也。○伊頭乃千別ハ。稜威の道別あり。稜威ハ。皇御孫命の天降給ふ。供奉の神等あす。有る。御勢の嚴めしき様を云。道別ハ。磐船よ乘し。虚空より降坐るませバ。其道路ある八重雲の中を。道と為し別ると云らよ。さる高天原云々より。天降

依志奉支まごハ。皇御孫命の天降坐里一間の種々此事を
約め書きたるあり。○四方之國中登。四方之國中ハ。天下四
方の國に中央あり。登ハ。此よるハ。俗よなせバとると云意。
さる此よるハ。神武天皇以來の事を申せ里。○日高見之國
ハ。純高見あり。純とハ。一向などの比多よる。純一あるを云。
見ハ高見ふど常いふ美あり。倭國を廻りの國々より。純高見
なる國あるをバ。あく云あり。○安國止定奉氏。下津磐根尔宮
柱太敷立。高天原尔千木高知氏。皇御孫之命乃美頭乃御舍
仕奉氏。天之御蔭日之御蔭止隱坐氏。安國止平氣所知食武
ハ。上よ出たる所々よ云里。○成出武天之益人。成出武ハ。生
出むる里。益人ハ。真進人の義よる。真ハ例の美稱。進を。須と
のみ云ハ。須佐之男命の御名の須里。進ハ義あり。抑も人え。

何よまを其業を。進之行ハ。産靈神の人をせよ。産靈給ふ本
義ふせバ。貴賤よ依らむ。並るの人を。真進人トハ呼つる也。
大丈夫と云も。真進荒雄の義よる。普通の真進人の中よ
るも。一際猛く烈く荒男と云義あり。○過犯家雜々罪事。
此下よ擧たる罪條の中よハ。自然ある穢災などもあをバ。
過犯とる云より。きざしくあをせど。過と犯罪トハ。有が中よ
る重き故よ。重きよ就まかくハ云るなり。さて上よ所知食
武云々。成出幸云々ふどある武ハ。往先を係する辞あり。或
此處よ。家牟と云過去の辞を用たるを。今行ふ所の大被よ
出たる罪條ふせバ。其被を行ふ場よ。過去此罪條ふ
れをなす。○雜々ハ。次ある天津罪。國津罪を。先づ一ツよ合せ
ると云あり。○天津罪止とハ。天罪と云ハと云意。○畔放。畔ハ。

突を犯し給へる事。發起つる事と云ふを。其高天原
より。犯し給へる事を云ふ。○國津罪ハ止ハ。天罪ハ對て。
此國より犯せるを。國罪トハ云ふ。さて天罪の方よ
ハ。止とのと云ふ。此ハ止ハト云ふハ。よづ天津罪を宣別す。
國津罪ト云ハ。其々と云ふ。○生膚断死膚断。断ハ生死と
も。又を以て。體を切斷する。又ハ切斷されども。疵を付る
るも云。必ずしも切斷に限るる非也。今日手を切る足を切
らど云。こハ生人よりもあせ。死屍よりもあせ。其膚ハ疵を付る
穢を以て。罪と為る事。人の身を傷ふ悪行の方を以て。罪
と為るハ非也。○白人胡久美。白人ハ。和名抄。白癡人面
及身頸皮肉色變白亦不痛癢者也。之良波太とある物の類。
其他世ハ白子と云物ふどの類を云。胡久美ハ同書。瘰肉

寄肉也。阿万之ハ云古久美とある是事。阿万之々ハ。贅
肉なり。此類ハ。汚き物ある故。穢を以て罪と為る事。○
己母犯罪己子犯罪。たゞ母子と云て。二つとも己が
と云ハ。次の母與子犯罪云々の母子とハ。同トからざる事
を。其を顯ハせる事。此五の犯ども。皆為す。きりざらる
を。其を推して。妄事なれば。罪と為る事。○母與子犯罪
ハ。先一人の女ハ娶る。又其女の。前ハ他人ハ嫁る産たる女
子のあるを。後ハ犯ざる。母とハ。其女子ハ對へる云。子
と名其母ハ對へる云。己が母己が子ハ非也。上條ハ
己と云る事。是ハ己がハ非也。と明らる事。○子與母
犯罪ハ。先或女子ハ娶る。又其女子の母を斬る。上あると
ハ。上下の違あり。さて上あるハ。先母ハ娶るハ犯ハ非也。

後よ其子を連ねて斬くるが犯あり。此ハ先子よ娶るハ
犯よ非し。後よ其母も斬くるが犯あり。此二條ハ母と
子とよ娶前後のよく分せて聞執るハ古文の妙あり。○
畜犯罪氣母能ハ。毛物の意ハあらむ。字の如く家よ飼た
く物を云。○昆虫乃災。大殿祭の下よ云。さて此よ下三條
を。災を以て罪と為るなり。○高津神乃災ハ。恒ハ虚空を飛
行く彼天狗あどの類。總て人の眼目ハ見えざる。妖魅を
さしつ云あり。○高津鳥災ハ。妖魅あどの鳥よ託して。頭世
人の目よハ。たゞ鳥よのみ見ゆるを云。されハ上あるハ。妖
魅の類ハ目よ見えざる。さまざま世よ災殃を起らしめ。或
ハ病を起して。世よ流行しある類の災。此ハ頭よハ鳥と見
えあがら。人よ依託し種々の災を為しある。妖魔の類よを。

頭幽よつきて舉ぐるあり。○畜仆志ハ。妖魔の類の。人家よ
畜ふ畜類を。忽ち病斃せしむる事あるを云。○蠱物為罪と
ハ。何よまを物實を設て人を誣ふ所為を云。さて此二條ハ
頭幽よ對したるをせしむる。畜仆志ハ。目よ見えぬ鬼魅の類。
此を顯當よ人の為を所為とす。○許々太久乃罪出武。許々
太久ハ上よ云。出武ハ。今の大被よ就て探索せしむる。ば。
多くの罪どもの出たる由るれど。往先を豫て未決の言を
用たるハ。今頭を出し罪どもの餘も。幾多の災出む。其
罪どもの如此出るを云義あり。さて穢を罪とすハ。災
よまを病よすれ。清々しき身。清々しき心ハ。受るまに無
く。諸の奸も。清く正しき人のまを所よ非む。畜仆志あどの
悪行も。身心とも穢しよ非む。行ひ難き事あり。然せ

バ。祓ハ其罪の元因ヨ付テ。行ふ事あるガ故。其發端ある
汚穢を以テ主トモス。○天津宮事以テハ。高天原ある
天照大御神の朝廷ヨシテ。行モセ給ふ儀式ニ倣ハス。其如
ク行ハ給ふ事を云。○大中臣ハ。天兒屋命ヨシテ。神の請ハ給
テ。掌ル官を云。此官ハ。恒ニ祭奠を嚴重ヨシテ。神の請ハ給
テ。事ヲ。君の神ヨ請ハ給ふ事をモ。共ニ美ク宇豆ノム給フベ
ク。中執奏モ臣ト云義ヲ。中臣ト云。大中臣ト云ハ。先ツ天皇
の大御事ヨカスルをバ。總テ大基ト云例ヨテ。神と君との
御中を執奏請ガ故。大中臣トハ云あり。此詞あるハ。神事
ヨ預ル職ヨ就テ云のミナリ。○天津金木。天津ハ。上の天津
ト同ト。金木ハ。握之木あるを。上ト續テ。津の音一重ある故
ニ省クを。熊を那ト云る也。手の末を手末ト云如ク。近く通

ふ音あり。さて握之木トハ。手ヨ取モカミ此小木を云。○本
打切末打断ハ。切モ断モ同ト事ある也。言を替テ云也。古辞
の文あり。さて其小木の本末を切捨テ。中らのよき程を。置
座ヨモスナリ。此ニ置座ニ造ル也。言を云テハ。言足ぬ如ク
ふれども。造ると云。さて。千座置座ル云々と。云續
けらるハ。古文あり。○千座置座ル置足。置座ハ。人々の
出シたる被物を。取集メテ居置ク臺あり。千座ハ。置座の數
多きを云。置足。置座とハ。置座を云。さて被物ト云。さて置ハ
何物を置ようと思ふ人あるベシ也。上ヨ許々太久乃罪
出武ト云る也。各々其被物を出テ事ハ。云。聞えられ
バ。自ア。其被物を置事ト聞ゆる也。古文あり。○天津管首。
管ハ草名あり。會ハ。佐緒の約ヨリ言ハ。佐ハ真ト通フ

言ふせバ。同く草名よ麻ふ。麻ハ。主と緒よ用る物よ。即ち。云よ同ト。○本外断末刈切氏ハ。此も本末を捨てる。中のよき所を用ふ。○八針取辟氏ハ。弥針採割てよ。細の割を云。此管麻を弥針採割。造せる大幣を以る。参集せる人々を禳ふ術を行ふ時あせバ。特更は拂ふと云。ざれども。太祝詞を宣せと讀舉るを度と。其職の人等。をせくの百官。男女の刀祢を。大幣を禳ふめせバ。其拂ふと云。言ハ。其所為の上よ有バ。言と辞を畧きたるをせ。○天津祝詞乃太祝詞事乎宣礼。天津ハ。天上ふる物よ准。此國の物を稱いふ。上の金木管麻あとの。天津ハ別。天津神と云と。同く天神の直に教授け給へる由あり。祝詞の義ハ。最初よ云。太ハ其天津祝

詞を貴み稱云。言あり。事ハ。言の借字。祝詞ハ告説言の義ふるよ。其上よま。重言と云。語を添つる。天津祝詞乃太祝詞と云ハ本よ用語をせど。後よ體言よ。唱事と成る故。再び言と云。語を加。唱ふる事と成せる也。宣礼とハ下知する言。今被處は参集せる上下の人等よ下知給へる。此天津祝詞乃太祝詞事ハ。宣礼と下知らる。時。参集る人の。一同よ奏を詞あせバ。其人々の恒に能暗に覺えつる故。略られたる。○如此久乃良波ハ。上の天津祝詞乃太祝詞事乎宣礼を承。其太諄辞を宣終。其宣終たるを受。如此宣バとハ續ける。○天磐門ハ。天津神の坐す處の御門あり。磐と名。堅固き由の祝言あり。○天之八重雲乎伊頭乃千別尔

千別氏ハ。上ニ云々。○所聞食武ハ。天神の御稜威イッを。弥重ヤ雲クモをオシ押齋オシあハし。祝詞言ウチコトをトモ滞トモあハく聞食納受給イとんと云る
あり。○高山之末短山之末。末ハ。山本ヤマモトと云ニ對タたる言コトあり。
山の頂イタダキの事。此ハ高山ハ云ル更マあり。短山ミヅノハ至キる迄マめと云、
意味あり。○伊總理ハ俗ニ煙ケリあハどの伊布留イフルと云と同トく。
凡スベ了物のおおろもハ。明アカあハるざるを云言あり。其明アカうな
らざらむむる物ハ。謂イハゆる大地チより立騰タチる濛氣モウキを指サす云
るあり。さて天神アメノカミハ。天磐門アメノイハを開ヒき。國神クニノカミハ。伊總理イノサマを搔別カキワ了
とあるハ。今宣イマノノリる太祝詞タマシを隔ヘち。慥マコトニ聞食納受給イふべ
きハ。辭コトの文フミハ如此カキハ云るあり。○聞食イ波ハ。聞食イ而有テ
者モノの意あり。下シあるも皆同ト。○皇御孫ミコノミ之命ノミコト乃朝廷乎始ハ氏
天下四方國ツチノヨリ波ハ罪止ツミト云布罪波不在ハ。今行イマノヨリハる。大祓オホハヒの趣

を天神國神の。聞食納給イひらる。朝廷テマツと始ハとハ。天下
四方國々ツチノヨリハ。罪ツミと云罪の限カキり罪ツミハ。一ヒトも残コらむ悉シく消
失シと云意あり。○科戸シナト之風カゼ。風ハ。級長戸邊シナトノヘ神の掌テ坐マゆるる
云。○御霧ミキリ。御ハ真マコトニ通トひる。真霧マコトノキリの意あり。○大津邊オホツチノヘ亦居大
船フネ。津ツチと名。凡スベ了舟の泊トる處トコロを云名ぬるを。大津オホツチと云ハ。多く
の舟フネどもハの泊トる居イる湊ミナトを云。○舳シラ解放イ艦フネ解放イハ。津ツチニ泊トる
居イる舟フネどもハ。舳シラ艦フネを撃ツぎ留置トめハのむせハあり。○押放オシハる。
押オシ放ハち出デるあり。○彼方カノヘ之繁木本シガラキノモト。彼方カノヘハ。此方コノヘニ對タする
言コトあり。俗コトニアチノ方ヘと云意。繁木本シガラキノモトハ。生茂オモシりある木キ本モト也。
○燒ヤキ鑣ハ乃敏鑣ニシメノハ。鑣ハ。燒ヤキ了ハ双フタをオシ物モノあハせバ。燒鑣ヤキハと云。燒太
刀ヤキタチと古コトく云イふハ如トし。敏ニシメハ利トあり。○掃ウチハ。殘ノコりあハく伐キ盡ツク
掃ウチふあり。さて科戸シナト之風カゼより。打掃ウチハラフ事コト之如ト久キウまでハ。罪ツミを祓

ひやる譬ふるを四つまで重ねる舉ぐるハ。被は依る罪穢の
残りなく清まる事を。強く云むが為あり。○遺罪波不在。上
より罪止云布罪波不在と云る。言重るる拙く整む如く
あれど。上ふるも。神等の聞食納るよ依る失るを云。此處ハ
残りなく清まる譬より續ける云故。遺罪波と云るあり。○
被給比清給事ハ。彼、天津祝詞乃太祝詞事を。天神國神の聞
食納坐る。被給ひ清給ふ事と云意あり。させば二の給ふる。
天神國神の御所為ふるが故。敬辞を添ふるあり。○高山
之末短山之末。言の意上よ云る。○佐久那太理ハ。廣瀬祭の
下よ云る。○落多文津速川能瀬ハ。瀧ち落る急流ある川ハ
瀬と云ふとあり。さる瀬織津比咩神の。速川の中より。殊ハ
瀬よ坐るる。此神の恒に掌給ふ所の災穢を。大海原よ持

出給ふよ。暫くも猶豫滞らせむ。急速に流遣給ふが故。瀬
よ坐るるあり。○瀬織津比咩止云神。倭姫命世記。荒祭宮
一座。皇大神荒魂。伊弉那岐大神所生神。名八十枉津日神也。
一名瀬織津比咩神是也とあり。禍津日神を。瀬織津姫と稱
し奉るハ。伊弉那岐大神御身滌の時。於中瀬降迹豆伎坐る。
生坐る神よ坐ませむ。瀬下津とハ稱奉るる。後まで
速川の瀬よ鎮坐る。かゝる謂よ依る事あり。○大海原尔
持出ハ。罪穢を。此神の流し遣る澳へ持出給ふとあり。○荒
鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會。荒鹽ハ。遙に遠き
沖の潮を云。鹽ハ。何れも潮あり。八百道ハ。海中より潮路と
云ふの所々あり。殊に烈に急流あり。其ハ幾筋も多
あるを能くせむ。八百道と云。八鹽道ハ。弥潮路あり。八百會

ハ。幾筋も多る潮路の遂は行巡り行會處を。八百會と云るよ。即ち八百道の八百會あり。さて其流を會ふ八百會は集り激も執り。潮を海底に巻没す。根國より到らむるなり。○速開都比咩止云神ハ。記よ。伊邪那岐大神。生水戸神。名速秋津日子神。次速秋津日女神とある是なり。此神ハ。瀬織津姫神の持出し給ふ罪穢を。泥土海潮もどく泌別て。彼鹽の八百會は吞入し給ふ事を掌り坐あり。○持可々吞可々ハ。水を吞音あり。總て物を吞。物を吞む音を。かぶくと吞。かりくと音む。あど云。類多し。持とハ。海潮は副來し罪穢を執持すと云意よ。下は持佐須良比とあるよ同ト。さて袂物は副し罪穢を。潮と共に海底へ巻没給ふハ。全此神の徳化は依事よ。其巻没給ふ時。音のがウくと為を。可々

吞とハ云るあり。但し其を此神の直に吞給ふと思ふハ違ふ。彼巻没る水と共に。罪穢を巻没す。氣吹門より輸り遣給ふなり。○氣吹戸を。氣吹門の義よ。根國へ罪穢を氣吹放つ處あり。○氣吹戸主止云神ハ。倭姫命世記よ。多賀宮一座。伊邪那岐大神所生神。伊吹戸主神。又名神直日大直日神是也。此神ハ。根國より荒び疎び來る。其禍を直して。平等平穩ならしめ給ふ神功徳坐せ。彼速秋津姫神の可々吞る。海潮と共に罪穢を輸り給ふを。此神の此門は坐ありて。根國は氣吹放る。輸り給ふなり。○根國底之國ハ。與美國の事也。○氣吹放ハ。風を以て氣吹遣り給ふなり。○速佐須良比咩止云神ハ。速佐須良比姫あり。○持佐須良比失氏ハ。在處知む成る。亡ナ給ふなり。崇神紀よ。流離の字をよめり。○不在止

ハ。不在止アツシト。云意也。○高天原尔耳振立聞物止馬牽立氏。高天原ハ。殿造トツツを云と。高天原尔千木高知と云と同意也。高くとも高くと云と云なり。高天原まで至るよりハ非也。馬牽立ハ。馬ハ耳疾ミミトき獸ある故也。天神國神は白き此被詞を疾く聞食納給ふ表物として奉せり。○夕日之降ハ。被ハ夕ユフは行ハる故也。○四國ト部ハ。後ハ伊豆對馬壹岐の三國より採用せど。古ハ何の國より今一國ハ採り。古のより四國ハ云るなる。○大川道被物贖物などを流棄て海原へ遣ふハ。川ハ其道をせバ。殊道と云るなり。○被却ハ。被竟了後。大川道は持出。被却る。此四國以下の辞。初なる集侍親王云々とある。初段宣命と。後ハ二季の大被

定まると時よからせたる丈あり。○此一章の意ハ。集侍親王等諸王等諸臣等百官人等諸は聞給へ。又天皇命の大朝廷は仕奉る。御膳を司る男女。武官の人等。多の伴の長を始り。内外は官司は仕奉る官人等。心あつむ覺え。慎ツシムべき事を等閑トホカし。雑々の罪を。今年コトシの六月の晦の大被。被ひ清給ふ事を。諸の人等聞給へ。高天の原は坐す。天皇の御祖神も。二柱は大神の詔命を以て。数多き至極の神等を集めて。議を給へ。皇御孫命ハ豊葦原の瑞穗の國を。安國と平ら。知食せと依り奉る。如此く依り給ひ。國中。制令は服従レツカせ。心のよ。振ハす。神等を。御使を遣して。云。釋聞せ。和ヤスし給ひ。尚服従するハ。誅伐給へ。言コトひ。磐根。少の草の葉を。語止し。御坐す。堅

固まる御座を離しめて。虚空に重なる雲を。嚴しき御勢に。道とあり別る。天降し給ひき。如此く依し給へ。天下四方の國の中央なるを。純高みふる大和國を。善國と定め給へ。其所に底の磐に宮柱を太敷立。虚空高く千木を上す。皇御孫命の美しき大宮を造り坐す。天を覆ひ日を覆ひ坐す。安國と平けく知食を。國中を生れ出る天の真進人等。過犯し多る雑々の罪を。まづ天罪と云ハ。田と田と此界を取放す。水を干し。速しう水を引る田に溉入る水道を埋め。用なき時。水を貯へ置く樋を放ち漏し。一度種を蒔たる上へ。又重る時。生育しめむ。田の土中。木竹の串を刺置る。下立難うらしめ。獸を生なうら皮を剥る人を驚し。皮の用たぬ様。獸の皮を剥ぎ。穢まりき處に屎より散しあどや。

幾許の罪をバ。天罪と別し宣別おきす。まづ國罪と云ハ。生人うらあせ死屍うらあせ。其膚に疵を付る事や。面は身體は肉色の白く變りたる白子や。無用の肉の贅り穢き人。我を生成し。母。又ハ我生たる女子を斬し。又ハ我妻の前。他人に嫁り産し。女子や。我妻の母を斬し。家は飼置く畜類を斬し等せし事。戸の透り入來る虫の災。虚空を飛行く。天狗などの類の。人は目に見えざる妖魅の災。妖魅あるの鳥に託して。人の目。ハ鳥とのみ見ゆる。災。妖魅ある。災。妖魔の類の。人家の畜類を忽ち病斃し。事。物實を設て。人を誑しなど。幾許の罪穢の出るありん。其罪あるの如此出なむ。高天原なる天照大御神の朝廷より。行かせ給ふ儀式は倣す。神と君と。中執持す。神祭を仕奉る職の人の。

小き木を本末を切捨て。中らのよき程を以て。人々の出
たる被物を取集て居置く。多の臺を造る。其上を置満て。
菅麻を本末刈捨る。中らのよき程を。細うに割て造せ。大
幣を以て。禳ふ術を行ひ。参集せる人々ハ。天神の教授給る
祝詞の天祝詞を宣と下知されバ。其人々の天祝詞言を宣
を。如此く宣バ。天神ハ。磐の如く堅固き御門を押開了。神々
の御稜威を以て。八重雲を打霽うして祝詞言を滞りなく聞
納給るむ。國神ハ。高山短山の頂に坐る。其山里より立
騰る濛氣を撥別る。隔なく慥に聞納給るむ。天神國神の如
此く聞食而有者皇御孫命の朝廷を始として天下四方の
國々ハ。罪と云罪の限の罪ハ。一は残らむ悉く消失る事
ハ。譬バ科戸の風は虚空の弥重雲を吹放つ如く。又朝夕の

霧を。朝夕の風の吹掃ふ如く。又廣き濛は泊る居る大船の。
撃ぎ留置し船艦の網を解放了。大海原に押放ち出ると如く。
又彼方の山に生茂る木本を。鋭き鎌を以て残るる伐盡
し掃ふ如く。遺たる罪ハ在らずと。彼天祝詞言を。天神國神
の聞納給る。被清め給る。高山短山の頂より。真下垂る瀧
ち落る急流の川の瀬に坐る。瀨織津姫神の大海原澳へ流
遣給ふ。如此く流遣給へむ。遙に速き沖の幾筋も多ある潮
路の。遠に行き巡る會處に坐る。速秋津姫神の彼海潮に副來
し罪穢を。かしくと音せさせ。海底に巻没給るむ。如此く
罪穢を海底へ巻没給るあらバ。根國へ罪穢を氣吹放つ處
に坐る。氣吹戸主神の。與美國へ風を以て氣吹遣給るむ。如
此く風を以て氣吹遣給へバ。與美國に坐る。速佐須良姫神ハ。

在、處も知らず成り止む給ふ。如此く止む給ふ。朝廷は仕奉
百官人を始す。天下四方の國のハ。今日より始す。罪と云罪
の限の罪ハ在、トと。高く遠く聞ゆる物の表と。此
慶へ馬を牽出し。今年の六月の晦日の夕方。大被は被
清め給ふ事を。諸聞食と申し給ふ。竟る四國のト部等ハ。大
川道は被物贖物を流棄す。被は却と申聞まじき。

○東文忌寸部。献横刀時呪。西文部 此ハ。神祇令。凡六月
十二月、晦日。大被。東西、文部云々。上、被刀讀被詞。謂、文部漢
也云々とあり。百濟人の末裔の爲事する上。此ハ
載たる詞と。漢音は讀まじき。皇國學も人等ハ
ハ。用ふき文章なれば。今ハ其解釋をもせむ。文章の大意
を知らむと欲ふ人々。祝詞考に就き心得べし。

謹請皇天上帝。三極大君。日月星辰。八方諸神。司命司籍。左、東王
父。右、西王母。五方五帝。四時四氣。捧以銀人。請除禍災。捧以金刀。
請延帝祚。呪曰。東至扶桑。西至虞淵。南至炎光。北至弱水。千城百
國。精治。万歳万歳万歳。

○鎮火祭 神祇令。季夏火鎮祭。義解。謂在宮城四方外
角ト部等鑽火而祭之。為防火災。故曰火鎮。と見えたり。此
六月十二月、大被を被行て。天下の罪穢の除り清る時
に當りて。更に清火に鑽改らる。也。宮城とる。大裏の外郭
より。所謂外重也。京城の外との異也。思混べらむ。

高天原 神留坐。皇親神漏義神漏美。能命持氏。皇御孫命波。豐
葦原乃水穗國乎。安國止平久所。知食止。天下所寄奉。志時。事
寄奉。志天都詞。太詞。事乎。以氏申久。神伊佐奈伎伊佐奈美。乃命。

妹背二柱嫁繼給氏國乃八十國島能八十嶋乎生給比八百萬
神等乎生給比麻奈弟子尔火結神生給氏美保止被燒氏石隱
坐氏夜七夜晝七日吾乎奈見給比吾奈妹乃命止申給比此七
日波不足氏隱坐事奇見所行須時火乎生給氏御保止乎所
燒坐支如是時尔吾名妹乃命能吾乎見給布奈止申乎吾見
阿波多志給比津申給比吾名妹能命波上津國乎所知食倍吾
波下津國乎所知白氏石隱給比與美津坂尔至坐氏所思
食久吾名妹命能所知食上津國尔心惡子乎生置氏來宣氏
返坐氏更生子水神能川菜壇山姫四種物乎生給比此能心惡
子乃心荒波曾水神能壇山姫川菜乎持氏鎮奉止事教悟給支
依此氏稱辞竟奉者皇御孫能朝廷尔御心一速給比波志為氏
進物波明妙照妙和妙荒妙五色物乎備奉氏青海原尔住物者

鰭廣物鰭狹物與津海菜邊津海菜尔至御酒者鰭邊高知
鰭腹滿雙氏和稻荒稻尔至尔如横山置高成氏天津祝詞乃
太祝詞事以氏稱辞竟奉止申

高天原尔神留坐皇親神漏義神漏美能命持氏皇御孫命波
豊葦原乃水穗國乎安國止平久所知食ハ上の所々出た
る。○天下ハ水穗國と餘の祝詞は在り同ト。○天都詞太詞
事ハ言の意大被の下に云る。さハ下の神伊佐奈伎云々
より事教悟給支すでの文を云。○神伊佐奈伎伊佐奈美乃
命御名の上は冠らせたる神ハ稱辞ふるが奇異なる謂也。
○妹背ハ男女相並ぶ時ハ夫婦よされ兄弟よすれ他人よ
まじ男を背と云女を妹と云此ハ夫婦と云ふ同ト。○嫁繼
ハ御合坐を事を云國能八十國島能八十島ハ八十八數多

○祝詞正解下

○十八

きを大凡云詞よ。多くの國々許多の島々と云事あり。
○八百万神等ハ。多の神等を云事あり。○麻奈弟子ハ。真之弟
子よ。最末の子と云事あり。○火結神。火で万物を産成を
徳ある物なせば。此神を。火産靈神とハ申事あり。○美保止を
御陰所を云。○被焼ハ。此神の御身やが。火よ其火やが
火産靈神あり。故に。御陰所を焼なせ給ふあり。○石隠坐
氏を。石屋を閉て幽居する由あり。此度の御産の有状のい
みトからむ事を豫て思ひ坐す。其状を男神よ見せ給ハ
トとの御心あらびあり。○夜七夜晝七日ハ。七日七夜よ
正數あり。大凡ハ非也。○吾乎奈見給事勿
せと云言よ。吾う幽居る石屋を。必ぞかいは見は為給ふ
事勿せと。約に給ふ御言あり。○吾奈妹命ハ。女神の男神を

申給ふ稱あり。奈ハ汝妹ハ兄よ。夫婦兄弟の間のみあら
む。女を妹と云如く。凡そ男を尊と親とて呼稱あり。○此七
日波不足氏ハ。女神の約に給ふ。七日七夜の日數よ未と
足ざるよ其日數の過を待あへ給ふてあり。○隠坐事奇
止ハ。國々島々よ。八百万神等を生給ふ時よどるか石
隠坐さまけむを。此時殊更に斯在るを。奇とハ思ひけ
む。○見所行須時ハ。見を敬語よ云ふ。石屋戸を引開きてぞ
見顯し給ひけむ。○火乎生給氏。上よ火結神生給氏美保止
被焼氏ハ。此詞の地より云るよ。其次よ夜七夜晝七日云
云ハ。伊邪那美命の御言也。かくて此ハ。實事を見給へる所
よ。火とる。其火結神の御事あり。○見給布奈奈ハ現今よ
見る所を答めて云事あり。未見ざる前より警るハ。上の奈見

給比曾比多志。○見阿波多志ハ。劇ハ々々不意より出ス。人を驚ヒ意ス。阿波ハ。淡スめ悪シむまどの阿波よ。物の見劣リまする様ノの言ハあるべし。○吾名疾能命波上津國乎所知食倍。吾波下津國乎所知年。上國トハ即ち此國土を云。下國トハ。其レ對シ。國土の根底ニ成レる夜見國を詔へるあり。さレ其國ニ往キ坐ス。欲ス立テハ。火を生給へる御有状ノの見苦ク。男神の御覽ニ給テむ事を辱シ給ヒ。勿カ見給ヒと申シ。石屋ニ堅ク刺隱ニ給へるを。男神の其を訝シ給ヒ。見行キ。事を耻恨ニ坐ス。男神ト此同ト國土ニ坐ス。御面ヲ合シ給ヒむ事を耻給ヒ御心の止アへ給ヒむ男神の御許ヲ離セ下國ニ往キ。再ビ御面ヲ合シ給ヒむと思ハる。○與美津枚坂ハ。此國土ニ夜見國ニ往キ。坂ノあり坂あり。○心悪子ハ。即ち火神あり。下ニ御心一速ニ給ヒ止ス。為シ氏トあり意ス。火神を惡シ給ヒむハ非シ。御稜威ノの究メ。健ク剛キ故ニ。其御性ヲ畏リ給へるあり。かせ其荒クび坐スむ時ハ云々ト和メ鎮メ奉セ。四種物を生給ヒ。教へ給へるあり。○返坐ス。與美津枚坂ニ。本居坐ス。所ニ歸リ坐スあり。○水神龍川菜植山姫。水神ハ。弥都波能賣ノ神あり。乾ハいと輕ク。水ニ沈ム事あり。水ニ浸ス。腐ル事あり。水を汲ム。最上器ニ盛テ。以テ水を汲ム。火を鎮セ。事あり。川菜ハ水苔ト。能水ヲ含む物あり。故ニ。今レ植木の根ヲ此物ニ絡ム。速キ處ニ送りあり。植山姫ハ。植ヲを掌ニ坐ス神あり。此植ハ。壁塗籠トあり。今レ火ニ備フ。○心荒波。曾ハ。為シの義あり。○水神龍植山

あゝ坂あり。○心悪子ハ。即ち火神あり。下ニ御心一速ニ給ヒ止ス。為シ氏トあり意ス。火神を惡シ給ヒむハ非シ。御稜威ノの究メ。健ク剛キ故ニ。其御性ヲ畏リ給へるあり。かせ其荒クび坐スむ時ハ云々ト和メ鎮メ奉セ。四種物を生給ヒ。教へ給へるあり。○返坐ス。與美津枚坂ニ。本居坐ス。所ニ歸リ坐スあり。○水神龍川菜植山姫。水神ハ。弥都波能賣ノ神あり。乾ハいと輕ク。水ニ沈ム事あり。水ニ浸ス。腐ル事あり。水を汲ム。最上器ニ盛テ。以テ水を汲ム。火を鎮セ。事あり。川菜ハ水苔ト。能水ヲ含む物あり。故ニ。今レ植木の根ヲ此物ニ絡ム。速キ處ニ送りあり。植山姫ハ。植ヲを掌ニ坐ス神あり。此植ハ。壁塗籠トあり。今レ火ニ備フ。○心荒波。曾ハ。為シの義あり。○水神龍植山

姫川菜乎持氏ハ。水神ハ靴を持ちて水を汲て火を鎮せ。埴山姫ハ。埴と川菜とを合せ。火を防げとの御量ある。○依此氏稱辭竟奉者ハ。上ある天都詞太詞事を受て云也。○御心一速比給止波志為氏御心ハ。火神の名字。一速ハ。借字よ。稜威疾イソハヤあり。比ハ夫利フリよ。其形状を云辭あり。給波志ハ。將來よさる事を何らと云意よ。既よ有る事ふ。受と云るとる少異あり。○進物波。明妙照妙和妙荒妙。五色物乎備奉氏青海原尔住物者。躰廣物躰狹物。奥津海菜邊津海菜尔至万氏。御酒者躰邊高知。躰腹滿雙氏。和稻荒稻尔至万氏。如横山置高成氏ハ。上よ出よ。所々よ云。○天津祝詞乃太祝詞事以氏ハ。上よ天都詞太詞事乎以氏申久とある結ひあり。○此一章の意ハ。高天原よ坐よ。天皇の御祖神なる。

二柱の大神の詔命を以て。皇御孫命ハ豊葦原瑞穂の國を。安國と平うに知し食せと。此國土を依し給る時。教へ給る。宣説言を以て言を。奇異ある伊邪那岐伊邪那美二柱の命也。御合ま。多の國々島々。許多の神等を生給ひ。いや終。火結神を生給ひ。御陰所を其御子に為し焼せ坐。石屋を閉し幽居坐。吾夫神の命よ七日七夜の間。吾幽居る石屋を。必むかいよみも為給ふ。約王給ひ。約王給。七日七夜の日数ハ足らざるに。女神の隱り坐事アヤシの奇と思ひ坐。石屋門を引開。見給へ。火を生給ひ。御陰所を焼せ。坐よ。其時女神の申し給ハ。吾夫神の命ハ。吾を見給ふ。約王申。恥。如此有形を御覽。給ふ事よ。吾夫命と御面を合せ給ハむ。

心苦しむを。吾夫神の命ハ。此國土を知食セ。已命ハ御許
を離シテ。國土の根底より夜見國を領むと白給ひ。石屋
より籠里給ひ。與美津枚坂より至り給ひ。思出給ふを。
吾夫神の命ハ知食を彼國土に。御稜威の究て健く剛き御
子を生殘し置て來よと宣ひ。更よ本れ所よ歸り坐て。
水神土神と乾川菜と四種の物を生給ひ。此健く剛き御
性の御子ハ御心荒む為。水神ハ。乾を持て水を汲り鎮せ。
埴山姫ハ。埴と川菜とを合せて防ぎ奉せ。と教悟し殘し給
し。太祝詞言よ依り。稱辭竟奉るハ。皇御孫命朝廷に。火神の
御心稜威疾ひ給む和み給むん為。進る物ハ美しき絹
布やどり又五色を備へ。大小の魚與邊の藻菜。御酒御食よ至り
まぐ横山の如くは高く置り。二柱の御祖神の教置給ひ。

天祝詞の太祝詞言を以り。稱辭竟奉ると申すなり。

○道饗祭 神祇令よ。季夏道饗祭 同之義解。謂ト部等於

京城四隅道上而祭之。言欲令鬼魅自外来者不敢入京城
故豫迎於路而饗遇也と云。京城四隅ハ。京の外郭の
外の四隅あり。餘神々をハ。其々社前より祭らる。此
神等ハ。衢ハ御饗を進りて祭り給ふ故。道饗祭と云
あらむ。さる此祭ハ。鎮火祭よつゞき行まらる。

高天之原ハ。事始。皇御孫之命止。稱辭竟奉。大八衢ハ。湯津磐
村之如。久塞坐。皇神等之前。申久。八衢比古。八衢比賣。久那斗
止。御名者申。氏辭竟奉。波久根。國底國。里麤備。疎備。來物。尔。相率。相
口會事無。氏。下行者。下乎守。理。上往者。上乎守。理。夜之守。日之守
尔。守奉。齋奉。進幣。帛者。明妙。照妙。和妙。荒妙。尔。備奉。御酒者。醴

邊高知^{タカシ}脛腹^{シラ}滿^ミ雙^{フタ}。汁^{シユ}頰^カ山野^{ヤマノ}住^ス物者^{モノ}。毛^{モウ}能^ノ和^ワ物^{モノ}毛^{モウ}能^ノ荒^{アラ}。
物^{モノ}青^{アヲ}海^{ウミ}原^{ハラ}。住^ス物者^{モノ}。鱈^{タカ}乃^ハ廣^{ヒロ}物^{モノ}鱈^{タカ}乃^ハ狹^{サマ}物^{モノ}。奥^{オキ}津^ツ海^{ウミ}菜^ナ邊^ヘ津^ツ海^{ウミ}菜^ナ。爾^ニ。
至^イ萬^{マン}。横^{ヨコ}山^{ヤマ}之^ノ如^{ゴト}久^ク置^{オキ}所^{トコロ}足^{タラシ}。進^{シム}宇^ウ豆^{マメ}乃^ハ幣^{ヘイ}帛^{ヒツ}乎^カ。平^{ヘイ}久^ク聞^ク食^シ。大^{オホ}。
八^ヤ衢^チ。爾^ニ湯^ユ津^ツ磐^イ村^ラ之^ノ如^{ゴト}久^ク塞^{サシ}坐^マ。皇^{スメ}御^ミ孫^マ命^{ミコト}乎^カ。堅^{カキ}磐^イ。爾^ニ常^{トキ}磐^イ。齊^{イヒ}。
奉^{マツル}。茂^{モウ}御^ミ世^ヨ。爾^ニ幸^{キハ}閉^ヒ。奉^{マツル}給^{タマフ}止^ト。申^{マタ}。又^{マタ}親^{オホ}王^{キミ}等^ト。臣^{ミコ}等^ト百^{ヒャク}官^{クワン}人^ニ等^ト。天^{アメ}下^ノ公^{キミ}。
民^{タタ}。爾^ニ至^イ。萬^{マン}。平^{ヘイ}久^ク齊^{イヒ}給^{タマフ}。止^ト。神^{カミ}官^{クワン}。天^{アメ}津^ツ祝^{イハヒ}詞^{コト}乃^ハ太^{オホ}祝^{イハヒ}詞^{コト}事^{コト}乎^カ。以^{モチ}。稱^{ホト}。
辭^{コト}竟^{マツル}奉^{マツル}止^ト申^{マタ}。

高天之原亦事始也。天皇の大御祖とす。迹迹藝命の天降より。此御國を知食一事ハ高天原よまを産靈大神天照大御神の御議ニ事始り。其御世治看を万の御政ハ。即天御祖神等の定め給ふ事のみよく行ふ給ふ事あるが故ニ斯ハ云ふ。○皇御孫之命止命ハ。皇御孫ノ属る命。

非也。皇御孫の御言とすと云意あり。さる上、文は引續け。高天原よまを御祖神等の事始め給ひ。御世知食を皇御孫の御言とすと。稱辭竟奉ると云が如し。○大八衢ハ。弥よ。衢の数の多きを云。○湯津磐村之如久塞坐ハ。祈年祭の下よ云。○八衢比古八衢比賣ハ。伊邪那岐命の夜見國より歸り坐時。其夜見坂より引居給ひ。千引石を道反大神と云。其道反大神の夜見門より塞坐。彼國よま荒び疎び来る鬼を防ぎ給ふ御靈を衢に祭るなり。稱申せる御名も。○久那止ハ。此神も同ト時よ夜見門よ。御杖を投棄給ひ。時よ成坐る神よ。同ト御功德ある神も。さて此三柱の神をバ。塞神と申さる。○根國底國里ハ。凡そ世よ在る禍事妖物の本ハ。夜見國よま發せるなり。故ニ斯ハ云

あり○麤備疎備来物_ル。相率相口會事無_ク。下行者下乎守
理。上往者上乎守_レ。夜之守日之守_ル。守奉_ハ。言の意。祈年祭
と御門祭との下を見合をべし。○齋奉礼此處_ニかく嚴重_ク
し。齋奉礼と令_テ給へる事_ハ。根國底國よりと云るより此
までの文_ハ。御孫命の天降坐_ス時_ニ。天神の。此神等を祭
らむ時_ニ。如此言_ハと詔傳_ル坐_ス。太祝詞言のまゝ_ニ。其やが
る天神の衢神_ニ令_テ給へる御言_ハ。守_ルべくを思_ハる。守
奉齋奉礼と_ハ。皇御孫命をわたり。○進幣帛者。明妙照妙和妙
荒妙_ル備奉。御酒者。厩邊高知。厩腹滿_ル雙_ル。汁_母爾_母穎_母山野_ル
住物者。毛熊和物。毛熊荒物。青海原_ル住物者。鱒乃廣物。鱒乃
狹物。與津海菜邊津海菜_ル至_ル。横山之如久置所足_ル。進
宇豆乃幣帛乎。平久_氣聞食_ル。上_ニ出た_ル所々_ニ云_レ。○大

八衢_ル湯津磐村之如久塞坐_ス。此神等の幸へ給ふ事を
申_ス。○堅磐_ル常磐_ル齋奉茂御世_ル幸奉_ハ。祈年祭の
下_ニ云_レ。○親王王等臣等百官人等。天下公民_ル至_ル。
上_ニ既_ニ云_レ。○齋給_ハ。諸の災殃_ハ無_ク平安_ニを云_レ。○神
官。まゝ_ニ祭を預_リ行ふト部を云_レ。○天津祝詞乃太祝詞事
と_ハ。上の根國底國より齋奉礼_ヲを申_ス。○
此一章の意_ハ。高天原_ニ坐_ス御祖神等の事始め給_ハ。御
世知食_ヲ皇御孫の命の御言_ト。稱_テ辭竟奉_ル。多の衢_ニ
五百箇磐群の如く立塞_ル障留_ル給_フ。皇神等の前_ニ申_ス。云
云と御名_ハ申_テ辭竟奉_ル。夜見國より荒_ビ朝廷_ニ親
み奉_ラぬ邪神姦鬼の枉_ク言_ハ移_リ乘_ル。彼物等の云事を受
入_ル。其_ノ心を同_クする事_ハ。上_ニより下_ニ至_ル何方_ニ

まら来らる入しめどと守り給ひ晝夜を捨ぎ守り奉り齋
ひ奉せ。されバ進る幣帛ハ美しき絹布を備へ奉り。御酒
御食海川山野の物に至るまで。横山の如く置足たり。献
る嚴しく大なる種々の物を平けく聞食る。多くの櫛は五
百箇の幣群の如く立塞り障留給ひて皇御孫命を堅磐の
如く常磐の如く。凶事を忌避し善らしめり。威里も足り
了勢も嚴ふる御世は幸へ給へと申も。又親王等王等臣等
百官人等。天下の大御寶に至るまで。平うに凶事あり善ら
ため給へと。神官の二柱の御祖の教へ置給ひ。天津祝詞
の太祝詞言を以て。稱辭奉ると申と成る。

○大嘗祭 此ハ大嘗とハ記し給へせど祝詞の中ハ天津
日嗣知看を始め由見えどせバ。毎年も行はせ給ふ新

嘗祭の時の祝詞あり。此祭ハ。十一月中の卯日ハ祈年祭
案上官幣の三百四座ハ神々を。神祇官の齋院より祭り
給ふ。諸司齋し今年の新稻を。御饗し幣を奠らる
るなり。其祭式ハ。四時祭式に見えたり。さき此祭ハ高天
原より。天照大御神より始り。此國よりハ迹迹藝命の。筑
紫。大朝廷より行ひ給ひ。今も絶ざる御祭なり。二
月の祈年祭。初穂波千穎八百穎ハ奉置云々。稱辭竟
奉幸と。約し給ひ。結び。古ハ。大嘗とも新嘗とも申
る。後に至り。踐祚始め行ハる。大嘗と云。毎
年も行はる。或新嘗と云事と成るなり。

集侍。神主。祝部等諸。聞食。登宣。

高天原。神留坐。皇睦神漏伎神漏弥命。以。天社國社。敷坐留。

皇神等前^ス白^ク久^ク今年十一月^シ中^ノ卯^ノ日^ニ天都御食^ヲ乃^ハ長御食^ニ能^ク
速御食^ヲ登^ル皇御孫^ノ命^ヲ乃^ハ大嘗聞食^ニ年^ヲ為^ス故^ニ皇神等^ノ相^ノ字^ヲ豆^ノ乃^ハ比^ビ
奉^ル堅磐^ハ尔^ニ常磐^ハ尔^ニ齋^ハ比^ニ奉^リ茂御世^ニ尔^ニ幸^ハ開^ハ奉^ル依^ル志^ハ千^ノ秋^ノ五^ノ
百^ノ秋^ノ尔^ニ平^ク久^ク安^ク久^ク聞^ク食^ク氏^ト豐^ク明^ク尔^ニ明^ク坐^ル幸^ハ皇御孫^ノ命^ヲ能^ク字^ヲ豆^ノ乃^ハ幣^ヲ
帛^ヲ乎^ハ明^ク妙^ク照^ク妙^ク和^ク妙^ク荒^ク妙^ク尔^ニ備^ル奉^ル氏^ト朝^日豐^ク榮^ク登^ル尔^ニ稱^ク辞^ク竟^ク奉^ル乎^ハ
諸^ノ聞^ク食^ク登^ル宣^ス

事^ノ別^ニ忌^ム部^ノ能^ク弱^ク肩^ヲ尔^ニ太^ク極^ク取^リ挂^ク氏^ト持^ル由^リ麻^ハ波^リ利^ニ仕^テ奉^ル幣^ヲ帛^ヲ乎^ハ神^ノ
主^ノ祝^部等^ノ請^ム氏^ト事^ヲ不^レ落^ク捧^ル持^ル氏^ト奉^ル登^ル宣^ス

集侍。神主祝部等諸。聞食登宣。高天原尔神留坐。皇睦神漏伎
神漏弥命以。天社國社登ハ。祈年祭の下云。○敷坐留ハ。
宮殿を建。其處に鎮坐を云。餘の祝詞ハ。天社國社
を定。齋き祭る由。此を其定め。天社國社に鎮坐

せる上より云。主客の別あるあり。○天都御食ハ。天忍穗^ヲ
耳^ヲ命^ヲを天降^リ給^フ時^ニ。天照大御神^ノの以^テ吾^カ高天原^ニ所^ニ御齋^ス
庭^ノ之^ノ穗^ハ亦^ニ當^ル御^ヲ於^テ吾^ノ兒^トと詔^ヒよ。皇御孫^ノ命^ノの聞^ク食^クを大^ニ
御^ケ食^クを。天津御食と申さる。○長御食能遠御食ハ。祈年祭
の下云。○皇御孫命乃大嘗聞食年為故尔ハ。九に大嘗
新嘗と云。天皇命の聞食を主とさる事と云。如此ハ申
さる。○皇神等相字豆乃比奉氏ハ。祈年月次に祈を申
し事を。皇神等の諾合納受に給ひると云意あり。○堅磐尔
常磐尔齋比奉利茂御世尔幸開奉^止依^ル志^ハハ。言^ハの意^ハ。祈年
祭^ノの下云。如くあれど。彼詞ハ。稻穀の御祈を主と
給ふ事ある故。多く將來に係り申し給ふ。此ハ。彼報賽の
為に行せ給ふ御祭りにあせむ。必其事を引出る。幸奉

止依志と云宣了事なり。依志賜布依志と云意味あり。次の千秋五百秋平久安久聞食氏云々。對照了了曉了。○千秋五百秋平久安久聞食氏ハ。上皇御孫命乃大嘗聞食年為故とある。其大嘗を。千秋五百秋と長く。平久安けく聞食とある。○豊明明坐年ハ。豊ハ稱辞明ハ。赤丹穗と同一。大御食も西を大御酒もあせ。食大御顔の赤らみ坐を云。次明坐と重ね云るハ。豊明と云と。後ハ其宴の名と成せしむ。上ハ體言。下ハ用言と成せしむ。神集集ふどの如し。○皇御孫命熊宇豆乃幣帛乎。明妙照妙和妙荒妙備奉氏ハ。言の意ハ祈年祭の下云。さるはこと。尔辞の下至。迄尔の字を加へる意得べし。○朝日豊榮登尔。稱辞竟奉乎。諸聞食登宣ハ。祈年祭の下云。○事

別忌部能弱肩尔太極取桂氏。持由麻波利仕奉留幣帛乎。神主祝部等請事不落捧持氏奉登宣ハ。祈年祭の詞の下云。さるが如くふれど。彼詞事不過とあるを。此ハ事不落落あり。落をハ漏をさる。此祭ハ。頒幣係云。彼祭ハ。祈言主と立たる故ハ。同事ら少異なり。心を清くす。○此一章の意ハ。新嘗祭參集せる神主祝部等諸今仕奉る御祭を聞給へ。高天原坐。天皇の御祖神たる二柱の大神の詔命を以て。天社國社と定め坐し。其社々鎮坐る皇神等御前。白也。今年の十一月の中卯日天照大御神の依給ふ。天國の大御食を。天皇命の常大御膳と。大嘗聞食む為の故ハ。祈年祭祈申事と皇神等の諾合納受給ふ。堅磐の如く常

磐の如く凶事を忌避す善らゝめり盛は足りて勢は嚴る
る御世は幸へ奉らむと依り給ひて。秋おとよ此大嘗を平
るは安らふ聞食了。大御顔の麗しく赤らみ坐す。皇御孫命
の嚴しく大なる幣帛を五色の縮布に至りて備奉りて。朝
日の麗しく登る時は。稱辞竟奉るを。諸聞食せと申す。又言
は云別る云。忌部の肩は太極を挂了。幣帛を取了齋ひ清め
了。其事は勞き功、み仕奉る此幣帛を。神主祝部等受取
て。漏り事多く捧持了奉せと申聞る有り。

○鎮御魂齋戸祭 中宮春官齋 戸祭亦同 四時祭式 十二 鎮御魂齋

戸祭云々。右於官齋院中臣行事とあり了。十一月中寅日
は。宮内省より行もせし鎮魂祭は結ひる御魂緒を。十
二月に至りて。日を撰びて。神祇官の西院ある齋戸神殿

は。鎮祭る御祭より。十一月の鎮魂祭はハ非也。注は。中宮
云々ハ。式より中宮准之と見え。又別條は。東宮鎮御魂齋
戸祭と何より同く此祭を行はる有り。

高天之原 カカノ 神留坐須 カミヅリ 皇親神漏伎神漏美能命 ミコノ 乎以 ニ 皇御孫
之命 ノ 波 ハ 豐葦原 トヨアシハラ 水穗國 ミヅホクニ 安國 ヤスクニ 止定奉 トドマシ 下津磐根 シノヅ 官柱太
敷立 シキタテ 高天之原 カカノ 千木高知 チキカカシ 天之御蔭 アメノミカゲ 日之御蔭 ヒノミカゲ 止稱 トドマシ 辞竟奉
奉御衣 オミ 波 ハ 上下備奉 ウヘノミ 宇豆乃幣帛 ウヅノヒ 波 ハ 明妙照妙和妙荒妙五
色物 イロモノ 御酒波 ミカサ 碓邊高知 ウヅエノミカシ 腹滿雙 ハラミツ 山野物 ヤマノモノ 波 ハ 甘菜 アマナ 辛菜 カラナ 青海原
物 モノ 波 ハ 鰯物 ササギ 鰯物 ササギ 與津海菜 ミツウミノ 菜 ハ 爾至 ニ 萬 マン 雜物 シラモノ 乎 ニ 如 ニ 橫
山置高成 ヤマオキタカナリ 獻留 オノメル 宇豆乃幣帛 ウヅノヒ 波 ハ 安幣帛 ヤスヒ 能 ニ 足幣帛 タリヒ 止 ト 平久聞食
皇 ミコ 我 ニ 朝廷 ミカド 常磐 トキハ 堅磐 カキハ 齋奉 イハヒ 茂御世 シホミヨ 尔 ニ 幸閉 サキヒ 奉給 オノセ 自 ヨリ 此
十二月 シツゲツキ 始來 ハジメキ 十二月 シツゲツキ 尔 ニ 至 ニ 萬 マン 平久御坐所 ヒラヒクミカサノ 令御坐給 ミカサノ 止 ト 今年 コトシ 十

二月某日齋比鎮奉止申。

高天之原_ル神留坐須。皇親神漏伎神漏美能命以_ル。皇御孫之命波。豊葦原能水穗國乎安國止定奉_ル。上_ニ出たる所_ニ所_ニ云_レ。さ_レ定奉_ル。安國と鎮定め給へるを云_ル。○下津磐根_ル宮柱太敷立。高天之原_ル千木高知_ル。天之御蔭日之御蔭止稱辞竟奉_ル。此ハ彼神祇官の西院_ニ坐_ル。大神等の鎮坐_ニ宮居の事_{アリ}。上の定奉_ルより續く詞_ニ非_ズ。さ_レ言の意_ハ。祈年祭の下_ニ云_レ。○奉御衣波上下備奉_ル。云々_ト稱辞竟奉_ル。奉御衣波と續く詞_ニ。彼大神等_ニ奉らせ給ふ_ル。上下備奉_ル。御衣と御袴_トを云_ル。○宇豆乃幣帛波。明妙照妙和妙荒妙五色物。御酒波。厩邊高知。厩腹滿雙_ル。山野物波。甘菜辛菜。青海原物波。鱒廣物鱒狹

物。奥津海菜邊津海菜_ル。至_ル。雜物乎如横山置高成_ル。獻留宇豆乃幣帛乎。安幣帛能足幣帛止。平久聞食_ル。皇_我朝廷乎。常磐_ル堅磐_ル齋奉。茂御世_ル幸。閉奉給_ル。上_ニ出たる所_ニ所_ニ云_レ。○自此十二月始。來十二月_ル至_ル。平久御坐所令御坐給_ル。今年十二月某日齋比鎮奉止申_ル。彼鎮魂祭の御魂_ニ匣_ニを天皇中宮東宮の御魂_トと_シ。八神の御坐所の齋院_ニ。平け_レ令大坐_レ給へ_ト。祈申させ給ふ_ル。自此十二月ハ。去年の舊_キきを當年の新_キき_ニ改め_ル。納替_ルを云_ル。來十二月_ル至_ル。當十二月_ニ鎮祭_ル。來年の十二月まで_ニあり。御坐所_ハ。天皇の御坐所を云_ル。あ_ラむ。謂_ル。齋戸_ニも八神殿の御事也。十二月某日_ハ。月の中_ニ吉日を擇_ビ用_ル。故_ニ。某日と云_レ。齋比鎮奉止申_ル。十一月鎮魂祭の御

○祝詞正解下

○三十九

魂匣を。右の齋戸の御坐所の齋處に鎮め祭らせ給ふと也。
○此一章の意を。高天原に坐す。天皇は御祖神たる二柱
の大神の詔命を以て。皇御孫命ハ。豊葦原の瑞穂の國を。安
國と平けく知食まべく鎮定奉る。大神等の大宮を。神祇
官の西院の下つ岩根に。宮柱を太知立て。高天原に千木高
知る。天を覆ひ日を覆ふ宮と。稱辞竟奉て。奉る御衣ハ。上の
衣下の袴を備へ奉る。嚴しく大なる幣帛ハ。五色の絹布
ふど。御酒御膳海川山野の雜の物を。横山の如く高く置成て。獻
る嚴しく大なる幣帛を。事故なく關落る事なき幣帛と。平
は安らよ聞食給ひて。天皇の大朝廷を。常磐の如く堅磐の
如く祝ひ奉る。嚴しき御世に幸へ給ひて。十一月の鎮魂祭
に鎮め奉る。御魂匣を此十二月に去年の舊きを。當年の

新きよ改めて納替るを。来年の十二月に至るまで。平らよ
齋戸に御坐々にめ給へと。今日の吉日に齋ひ鎮め奉ると
申すとす。

○伊勢大神宮 此ハ。下は大神神の大宮に仕奉る御祭の
祝詞どもを。列ね記されどもを。端を改めとかく記され
どもあり。

○二月祈年。六月十二月月次祭 是より下の六は祝詞を。
伊勢大神神の宮にむかひて。御使の中臣の宣申をまを。
さて祈年祭詞ハ。既よ上よ出とる。天社國社のと。朝廷よ
るる等しきを。此よ又此詞あるハ。諸社のハ。神主祝部を
召上せらるるを。神宮ハ。御使を以て奉らせ給ふが為
に。此詞ハ作らせたるなり。かくも九の事どもハ。祈年

祭の辞別の文は盡されし故に。此ハ其御使の幣帛を贈り奉らせ給ふ由のみあり。祭の儀ハ延暦儀式帳より

よ委し。披き見る所。
天皇我御命以て。度會乃宇治乃五十鈴川上乃。下津石根爾稱
辞竟奉留皇大神能大前爾申久。常毛進流二月祈年。以六月月
次之。辭大幣帛乎。其官位姓名乎。為使天。令捧持。進給布御命
相換申給。申給。申給。

天皇我御命以て。上の春日祭の詞に。天皇我大命尔坐せ
とある如く。古くハ皇御孫命とあるを。後ハかくり換た
るあり。○度會乃宇治乃五十鈴川上ハ。今も大宮の在る所
あり。○下津石根爾稱辞竟奉ハ。下津岩根の下。大宮柱太
敷立天と云言を畧けるあり。○常毛進流ハ。常住不斷の事

に成るありを云。下の詞にもある。凡皆同ト。○令捧持を。
御使の中臣は捧げ持しむるを云。此ハ上ある祈年祭詞に。
皇御孫命能宇豆乃幣帛乎。稱辞竟奉。宣とある。其を指す
なり。○御命乎ハ。上。天皇我御命以てとある。對照あり。○
一章の意ハ。天皇命の敕命を以て。度會の宇治の里の五十
鈴の川上の大宮は稱辞竟奉る。皇大神の大御前ハ申を。
恒例に依りて。二月祈年の大幣帛を。其官位姓名を御使
と。捧げ持しめりて。獻り給ふ。天皇の大命を申し給ふと
申す。

○豊受宮 謂ゆる外宮の御事あり。此詞は上の大御神の
と同じ。祈年。月次祭のあり。
天皇我御命以て。度會乃山田原乃下津石根爾稱辞竟奉。豊

受皇神ウケミカミ申ウケマシ久ク常毛ツネモ進流シノリ二月ニケツ祈年イノシ月次ツキツキ祭マツル唯タラシ以ヨリ六月ムツキ大幣帛手オホヒラキテ
某官位姓名シノシヨクノナニガシ乎コト為使シテ天アメ令捧持シテ進給布シテ御命乎ミコノミコトヲ申給ウケマシ止ト申マシ

度會乃山田原ハ。今も大宮の在る所あり。此詞ハ。宮處と大神の御名と異なるのみよ。總て上ると同ト。

○四月神衣祭ニケツ准ノリ之ノ月ツキ此祭ハ。四月九月共ニ十四日あり。此ハ皇大神宮と。荒祭宮と限る。行ハる。神事多々。神祇

令シ。孟夏神衣祭。義解ニ。謂伊勢大神宮也。此神服部等。齋戒潔清。以參河赤引。神調糸織ニ作神衣。又麻績連等。績麻。以

織敷和衣。以供神明。故曰神衣。其の儀等式ニ委ト。

度會タク乃ニ宇治ウヂ五十鈴川イツスズガハ上ノ也ニ。大宮柱オホミヤハしら大敷立オホシキタテ天アメ高天原タカマハラ尔ニ千木チキ高

知シ天アメ稱ナヅケ辞ハヒ竟マツル奉留マツル天照坐皇大神アマテラスイミマミカミ乃ニ大前オホマヘ尔ニ申ウケマシ久ク服織麻績ウケマシ乃ニ人

等ト乃ニ常毛ツネモ奉仕留マツル和妙荒妙ニ乃ニ織オリ乃ニ御衣ミコノイ乎コト進事乎シノコトヲ申給止ウケマシ申マシ荒

祭宮マツルミヤ毛モ如是申カコシウケマシ天進止アメノシノリ宣ノリ人祓宜内ヒトハヒナカノ

度會乃宇治五十鈴川上尔。大宮柱太敷立天。高天原尔千木高知天稱辞竟奉留ハ。云々の處ニ大宮を建テ齋き奉ルと

云事あり。○服織麻績乃人等ハ。姓氏録ニ。服部連天御辨命之後也。神麻績連天物知命之後也。此氏々の人等と

云ふとあり。○常毛奉仕ハ。恒例ニ依リ奉仕あり。○和妙荒妙乃織乃御衣ハ。大神宮式ニ。和妙衣者服部氏。荒妙衣者麻

績氏。各自潔齋始ニ從ヒ祭マツル月一日。織作ニ至ラ十四日。供奉ルとあり是也。○申給止申ハ。儀式帳ニ。官司常例告刀申とあり是也。

○如是申天進ハ。上ニありハ。官司の直ニ神宮ニ向テ申マシるが故ニ申給止申と云。此ニあり。官司其祝詞を申マシ後ニ。

大神宮の祓宜内人ニ宣ス。其宮ニ申マシめ奉ル事アリが

故よ。是よ於る稱唯あるなり。○祢宜内人。式よ二所大神宮
ともよ。祢宜大内人あり。荒祭宮よ。内人あり。さて荒祭宮
ハ。神宮の別宮の名あり。○此一章の意ハ。度會の宇治の五
十鈴川上よ。大宮柱太敷立。高天原よ千木高知たる大宮よ。
齋き奉る稱辞竟奉る。天照坐皇大御神の大前よ申る。服部
と麻績との氏々の。人等の恒例よ依る仕奉る。縮布の御衣
を献る事を申給ふと申る。祢宜内人等ハ別宮の荒祭宮よ
も。如是く申る献せと申聞をあり。

○六月月次祭十二月。六月十二月月次祭ともよ。朝廷の
御神事ハ十一日あり。儀式祭式ともよ。太神宮幣帛ハ置
別案上差使遣之とあり。然る其使の到着る。十六日ハ
度會宮。十七日ハ大神宮の御神事あり也。大神宮式。使

中臣申詔乃。次官司宣祝詞とあるを以見せバ。使ハ中臣
氏の人々を任る。御定多し。然せバ官司の宣るハ上の
巻よ。六月十二月月次祭の條よ出る。天社國社と。大
神宮辞別と。此ニよ有けり。其月次祭詞并其辞別
ともよ。神祇官よ。大神宮よ申る。給ふ詞を。使中臣
よ宣る所よ。あるを。中臣ハ伊勢よ向ふ。大官司を
し。祢宜以下の人々よ宣る。共々よ皇大神の御前
よ申る。其詞を用る内よ。其取捨無き
有る。所以よ右の月次祭詞を。御前よ申る時よ
ハ。何社と雖各々異あるべき也。然せバ上よ出る。二
月祈年。六月十二月月次祭詞の如きハ。必古来より用
來る所あり。べきあり。然せども其辞別よ至る。文を甚

く換らせり。此、月次祭の詞とハ成せるなり。是以、上、六月、月次祭詞と辞別と有る。此、六月、月次祭詞と。辞別と。同ト事のニ、ある也。さる大神宮ハ此詞あり。明らぬを。度會宮ハ至るハ。月次神嘗祭とも。御使を以令獻給ふ幣帛の詔詞あり。彼大神宮司の充奉る。國々の神田所々の神戸ハ献物ハ付るハ。別ハ祝詞ある事なり。思ふハ度會宮の万事ハ。大神宮ハ准行ハ。御定ぬ。此詞ハ度會乃宇治五十鈴乃川上云々。天照坐皇大神とあるを。度會乃山田原乃云々。豊受大神と換へ。下ハ荒祭宮月讀宮云々とあるを。多賀宮云々と。換へ用らせり。此詞ハ。上る。伊勢大神宮二月祈年六月十二月、月次祭詞の次ハ在べきを。豊受宮を隔る。此ハあり。

又下る。九月神嘗祭。豊受宮同祭。同神嘗祭とある此、同字ハ豊受宮ハ係る同ある事を知らせむ為ハ書ると。必、換用られし事ハ脱せり。かくて此詞ハ。上る。二月祈年六月十二月、月次祭詞を。御使の申し畢る後。大神宮司の宣る所あり。此を宮司より神主物忌ハ宣聞せむ。此ハ於る稱唯あり。共々ハ皇大神の大前。其天津祝詞の太祝詞を申さぬ。

度會乃宇治五十鈴乃川上云々。大宮柱太敷立天高天原云々。高知天稱辞竟奉留。天照坐皇大神乃大前。申進留。天津祝詞乃太祝詞乎。神主部物忌等諸聞食止宣。御内人天皇我御命。坐御壽乎。手長乃御壽止。湯津如磐村常磐堅磐。伊賀志御世。尔幸閑給。阿礼坐皇子等。惠給。百官人等。

天下四方國能百姓至長平久作食留五穀豐令榮給
比護惠比幸給比三郡國處處寄奉神戶人等能常進
留御調絲由貴能御酒御贄乎如横山置足成天大中臣太玉串
本隱侍天今年六月十七日乃朝日乃豐榮登尔稱申事乎神主
部物忌等諸聞食止宣神主部荒祭宮月讀宮如是久申進止
宣亦稱進

度會乃宇治五十鈴乃川上本大宮柱太敷立天高天原尔千
木高知天稱辞竟奉留ハ上の神衣祭の下云里○天津祝
詞乃太祝詞ハ大祓の下云里ささ此よハ次ある御壽
乎手長乃御壽止云々護惠比幸給よを云ある○神主部
ハ祓宜ハ更あり内人物忌とよ荒木田氏の部と云る也
下ハ祓宜内人等共稱唯とあるを照應了曉るべし部ハ其

群を云祓宜神主と内人神主と物忌神主と三種あぶが故
云ささ祓宜内人ハ職名よ神主ハ朝臣宿祓よどの如
く姓あり皇大神宮よハ荒木田氏の人々悉く神主姓也
○物忌ハ大同本記よ神主乃女子等未嫁乎物忌亦定云々
とあり了此職ハ神を祭るとよ供進る御饌以下の物を
齋清め作呈仕奉る職あり○諸聞食止宣ハ大神官司たる
人朝廷の大御命を受賜りて天津祝詞を自ら申奉
る神主部物忌等も傳へ申さむる由あり○祓宜内人
名上云里○天皇我御命亦坐ハ春日祭の下云里○御
壽ハ天皇命の大御息内あり○手長ハ足長あり○湯津如
磐村常磐堅磐尔ハ祈年祭の下云里ささ此下ハ儀式帳
及行事記よハ伊波比與佐志給比の八字あり此ハ落たる

あつる。此詞あらざる。事足らぬを。其言の意ハ。祝寄
遊。○伊賀志御世ハ。祈年祭の下よ云。○阿礼坐ハ。顯坐
よ。生る事あり。○百官人等天下四方國能百姓ハ。上よ
出たる所カよ云。○作食留ハ。常よ物を食ふ事を多倍留
と云。賜り食ふ由あり。○五穀ハ。龍田祭の下よ云。○三
郡。度會多氣飯野の三郡ハ。式よ。三神郡とも。三箇神郡とも
云。全く此大御神へ寄せ奉り給へる。神の御縣なり。神封
戸ハ。此三郡の外よ。飯高。壹志。安濃。鈴鹿。河曲。桑名もあせ
ど。専らるを舉ぐる。○國々ハ。大和よ十五戸。伊賀よ二
十戸。志摩よ六十六戸。尾張よ四十戸。参河よ二十戸。遠江よ
四十戸。是等を大神の御厨と云。○處々寄奉_留神戸。大和
の宇陀郡よ二町。伊賀の伊賀郡よ二町。伊勢の桑名。鈴鹿。阿
濃。壹志。飯野。度會。郡々の中よ。四十二町一段あり。是を大神
の大御田と云。○御調練ハ。御貢の系也。○由貴。御酒御贄。
由貴の言は意ハ。中臣壽詞の下よ云べし。御贄ハ。御饌ハ。更
よ。海山の味物を云なり。○大中臣ハ。大神官司を云。言
の意を。大被の下よ云。○太玉串_亦隱侍天。式の此祭の次
弟よ着木綿。賢木是名。太玉串と註し。其言の下よ。大神官司
并執_{太玉串}とあり。大神宮神封の荷前。御酒御贄を。祢宜内
人以下。人々を率ゐ参る。太玉串_亦前よ蹲坐居る。其由を申
し奉る事を云。太玉串よ覆せたる状を。隱侍とハ云。
○荒祭宮月讀宮_亦如是久申進ハ。此二宮も。此天津祝詞
を申し。幣帛を奉せと。大神宮の祢宜内人等よ宣るあり。
斯る此詞を其祭日よ持参る。其大前よ申事なり。さる荒

祭宮ハ。十八日。月讀宮を。十九日。祭らるる。○此一章の意ハ。度會の宇治の五十鈴の川上。大宮柱を太敷立。高天原。千木高知たる大宮。齋き奉る。稱辞竟奉る。天照坐皇大御神の大御前。申奉る。二柱御祖神等の教へ置給ひ。天津祝詞の太祝詞を。神主の群。物忌等諸聞食せ。天皇命の大詔命の隨。大御息内を。足長の御息内と。五百津磐群。如く。常磐の如く。堅磐の如く。動きまゝ。威に嚴らる。御世。幸へ給ひ。生出る皇子等。も惠給ひ。大朝廷。仕奉る百官人等。天下四方國の大御實。至るまゝ。長く平けく。作らる食。五穀を。豊に榮え。め給ひ。護る惠。幸へ給へと。渡會多氣飯野の三神郡。國々。慶々。寄奉る。神戸の人等の。例。依る献。御貢の絲。由貴の御酒海山の

味物を。横山の如く。多く置足。大神と大君との中。執持。御祭仕奉る。神主ハ太玉串の前。蹲居。今年六月の十七日。朝日の麗。昇る時。称へ申事を。神主の群々。物忌等諸。聞。食せ。祓宜内人等ハ。荒祭。宮月讀。宮。其。御祭の日。持参。其大前。如此く。申。献。也。

○九月神嘗祭。此御祭ハ。九月十一日。天皇大極殿。臨。ませらる。御使。幣帛を授賜。其御使。伊勢。参。向。ひ。十六日。あつ度會。宮。奉。十七日。大御神。宮。奉。らる。さ。六月十二月の月次祭。此神嘗祭。ハ。重。き御祭。多。殊。此御祭。を。バ。重。く。事。あり。祭典の。次第。供物の色。多。大神宮式。四時祭式等。悉。

皇御孫命御命以。伊勢能度會五十鈴河上。稱辞竟奉。天照

木高知天稱^{キタカチ}、^テ辭^シ竟^ス奉^ル留^ル天照坐皇大神乃大前^{アマテラス}、^ニ申^ス進^ル留^ル天津祝^{ツク}詞^{コト}乃^ハ太祝詞^ニ乎^ニ。神主部物忌等諸聞食止^{カミヤ}宣^ス。林^{ハヤシ}内^ノ人^ノ。天皇我御命^{ニギハヤヒ}、^ニ坐^ス御壽乎^ニ。手長乃御壽止^テ湯津如磐村常磐堅磐^{ユツ}。伊賀志御世^{イハ}、^ニ尔^ニ幸^ス開^ス給^ル比^ニ阿礼坐皇子等^{アヒマ}。^ニ呼^ス惠^ス給^ル比^ニ百官人等^{ヒヤククワン}。天下四方^{アマノヨ}、^ニ乃^ハ百姓^{ヒヤクシヤウ}、^ニ至^ル長平久^{ナガヘラキウ}、^ニ護^ル惠^ス、^ニ幸^ス倍^ス給^ル止^ス。三郡國^{ミヤノクニ}。處處寄奉^{トコロトコロ}、^ニ神^{カミ}戶^ノ人^ノ等^ノ能^ク常^ニ進^ル留^ル由^ヨ紀^キ、^ニ御^{ミコ}酒^ノ、^ニ懸^ス稅^ノ千^チ稅^ノ餘^ノ、^ニ五百^{イハヒト}稅^ノ乎^ニ。如^シ横山^{ヨコヤマ}、^ニ置^ス足^ス成^ル天^{アメ}、^ニ大^{オホ}中^{ナカ}臣^ノ、^ニ太^{オホ}玉^{タマ}串^ス、^ニ尔^ニ隱^ル侍^シ天^{アメ}、^ニ今^{イマ}年^{トシ}。九月十七日^{クニナナナナ}、^ニ朝^{アサ}日^ヒ豐^{トヨ}榮^ス登^ル、^ニ天津^{アマノ}祝^{イハヒ}詞^{コト}乃^ハ太祝詞^ニ、^ニ辭^シ乎^ニ。稱^{ナヅケ}申^ス事^{コト}乎^ニ。神主部物忌等諸聞食止^{カミヤ}、^ニ宣^ス。林^{ハヤシ}内^ノ人^ノ、^ニ荒^{アラ}祭^{マツリ}宮^{ミヤ}、^ニ月^{ツキ}讀^{ヨミ}官^ノ、^ニ如^シ此^{コト}、^ニ申^ス進^ル止^ス宣^ス。神主部^{カミヤ}、^ニ共^ニ稱^{ナヅケ}進^ル宣^ス。

此祝詞の辞どもハ。上の祝詞どもより大概ハ出る。故次。始め出る。詞のみを註へ。○申進ハ儀式九月十一日

奉伊勢大神宮幣儀。好申且奉礼と。大御命宣し給へ。其を指るあり。○懸稅ハ。世記に所謂懸久真多里。大神宮儀式帳。細稅。大半斤。太斤と云ふ。止由氣宮儀式帳。細稅。大稅。懸稅。稻といひ。大神宮式。小稅。大稅。斤稅とあり。何れも三等あり。文字の異なるのみなり。懸久真と云ハ。右の三等の差別を立めて云稱多里。世記に。拔穂尔令拔天。皇大神御前。懸久真。尔懸奉始支云々。千稅奉始事因茲也。と見えり。懸久真とハ。懸米と云事あり。懸稅ハ。内外の玉垣に懸奉るものと。二所大神宮儀式帳に見えり。さて大稅を多知加良と云ハ。田力より。春百姓の借る。田を耕む力と云る由あり。此ハ。賦役令義解。凡官稻之源。出自田租。即分為三。一曰大稅。二曰粗穀。云々。此稅ハ。一國一國に貯置

其を民に割付了貸し。其元を夫税と云ふ。毎年は動さむ置き。貸しする利を取て。京へ上る。是を粗穀と云。粗よ上る故の名多し。○千税餘五百税ハ。行事記するふハ。千税餘八百税と有を以て見せバ。たゞ教の多きを云ふ也。

○齋内親王奉入時 齋内親王とハ。皇御孫命の御手代とす。天照大御神を齋き奉らせ給ふ由の稱ふり。齋宮式と。凡天皇即位者。定伊勢大神宮齋王。仍簡内親王未嫁者ト之。云々とあり。種々の公事神事等あり。

進神嘗幣詞申畢。次即申云。辞別氏申給久。今進流齋内親王波依恒例氏。三年齋比清麻波理氏。御杖代止。定氏進給事波。皇御孫之尊乎。天地日月止。共尔常磐堅磐。尔平氣安久御座。武止御杖代止。進給布御命乎。大中臣茂粹中取持氏。恐美恐美。申給久。

申。

進神嘗幣詞申畢。次即申云。此まど題號あり。其詞ハ次ハ擧たるが如し。此ハ神嘗祭詞の辞別ふせど。齋内親王ハ。毎年新に奉るは非せバ。大御神の大前ハ申さざる事あり。故に神嘗祭の詞ハ次へ直に續けるハ置さるあり。○辞別氏申給久ハ。上の神嘗祭詞を申畢。次ハ此齋内親王を奉らせ給ふ事を申させ給ふなり。○今進流ハ。齋内親王。初め了神嘗の祭場ハ参入給ふ。其儀式ハ預に奉仕らせ給ふ。これ現今奉進ると云義あり。○依恒例氏ハ。崇神天皇の大御世より以降。皇女を託奉り給ふ常典とあり。云。○三年齋比清麻波理氏ハ。三代實録元慶三年九月の條。今奉進留齋内親王波。此依恒例天。三箇年間。波。齋清天。天照大神乃

○祝詞正解 下

平

御杖代亦定天。奉進留内親王曾中臣宜亦告申天奉礼。天皇の勅らせ給ひしが如く。野宮に坐を事三年。其三年に當る八月の末に。京を發せし。九月の初に伊勢へ至り給へるなり。○御杖代ハ。皇大御神の大御手ニ附て。傳き奉るを云ふ。其代ハ物實礼代と云は如く。其下ニ添て云ふ。御杖ハ皇大神ニ係り。代ハ齋王ニ係り。○御命乎ハ。上ニ引る三代實録の詔命の如く。恒も教せ給ふを。受賜せし。中臣の此詞を以て。皇大神の大前ニ申せし。○大中臣。こゝハ。御使の中臣なり。○茂穉中取持亦ハ。嚴矛の柄の中らを執持しが如く。神と君との御中を。事宜しく執成し申を由の譬あり。ち中臣壽詞の下考合をべし。○此一章の意ハ。詞は取別て申給ふ。今日の御祭仕奉るに進る。齋内親王ハ。恒

例のすまふ。野宮より三年の間。齋清ませり。皇大御神の大御手ニ附て傳き奉る代と定めし。進り給ふ事ハ。皇御孫之命を。天地と日月と共に常磐の如く堅磐の如くは動きまじく。平けく安けく大坐しめむ。大御神の大御杖代と進給ふ。天皇の敕命を。此使の中臣が。嚴矛の中執る。本末傾けず。皇大御神と皇御孫命との中執持る。恐み恐も申給ふくと申とあり。

○遷奉大神宮祝詞。豊受宮。ある二所大宮を二十年より一

度。改造し給へる時。御使の大御神に申を宣命あり。

皇御孫命能御命乎以て。皇大御神能大前申給ふ。常乃例。依氏。廿年。尔一遍。比大宮新任奉。雜御装束物五十四種。神寶。廿一種。乎。儲備天。被清賣持忌波理。氏。預供奉。辨官某位某姓名。

乎
差使サシツクシテ進給マシヨリ状乎申給マシヨリ申マシヨリ。

常乃例尔依依氏廿年尔一遍比大官新任奉ハ。大神宮式凡大神宮二十年一度造替正殿寶殿及外幣殿皆採新材構造云々とあり。東西の地更々大官柱太敷立高天原千木高知稱辞定奉まと。記まままるまく。見たり聞り。人の能知まるまが如し。○雜御装束物五十四種神寶廿一種ハ。委く式見えませまバ。今略ま○儲備天被清賣ハ。宮材を採る山口祭の時り始る。度々の被あり。殊は御装束を奉る前はハ。大裏を始める。京城近江伊勢まく大神宮まる。御使立たる被の事あり。○預仕奉ハ。此御使を預まる仕奉るまり。○辨官。是ハ造宮使の外は。右の装束雜物を送奉る御使ま。辨大夫一人。史一人。史生一人。官掌一人。使部二人太政

官より出立ち神祇官まりも。史史生神部ト部等を。部領一送奉る也。○此一章の意ハ。皇御孫命の詔命を以て。皇大御神の大御前は申し給ふ。恒例の隨は廿年は一度。大官を新は造仕奉る。雜の御装束物五十四種。神寶廿一種を儲け備へる。被清め。種々此進物を持齋まる。預て供奉る辨官其を差使しる。進まり給ふ状を申し給ふと申とあり。

○遷却崇神祭 上件祈年祭より以下。遷奉大神宮祝詞までハ。九つ四時祭の統属あるを此まり以下ハ。共は臨時祭の部類より。其事其時を得て被行神事あり。然るは臨時祭式より。此祭の事見えざるハ。此詞の題號とハ。其祭號の異より。載らせたるまる。或は疫病の時ありハ。其疫神を祭京城内の妖氣を攘はひ。或は疫病の時ありハ。其疫神を祭

止宇須波伎坐進幣帛者明妙照妙和妙荒妙尔備奉氏見明
物止鏡既物止玉射放物止弓矢打断物止太刀馳出物止御馬
御酒者厩戸高知厩腹滿雙氏米穎山尔住物者毛乃和物
毛能荒物大野原尔生物者甘菜辛菜青海原尔住物者鱈廣物
鱈狹物與津海菜邊津海菜尔至如横山之如久几物尔置所
足氏奉留宇豆乃幣帛乎皇神等乃御心毛明尔安幣帛乃足幣
帛止平久聞食氏崇給比健備給事無之山川之廣久清地尔遷
出坐氏神奈我良鎮坐止稱辞竟奉止申

神留坐氏ハ皇御孫命を天降一奉与給ふ事まつき云出
る語ふせを姑く語を切て下文の天降云々へあけて見る
べし。○事始ハ道饗祭の下よ云。○神漏伎神漏美能命以
氏ハ祈年祭の下よ云。さる常よハ皇親と親とりの詞

を。上よ置べきを。然らざるハ事始給ひより直は續くが
故多。○天之高市ハ神代紀ハ神等の集ひ一所を天高市
と云。天安川邊ともあせを。天安川邊ある平地の最高き處
を云。市とも。神等を集る料を設とる所ふるを以いふ。後よ
交易人の集ふ所。市と云。是より出たる也。○八百万神
等乎。神集々給比神議々給氏。我皇御孫之尊波。豊葦原能水
穗之國乎。安國止平久所知食止。天之磐座放氏。天之八重雲
乎伊頭之千別。支千別氏。天降所寄奉志時尔。此段をべて大
被詞よ同ト。但彼詞よハ荒振神を神問一神攘ふ事を。文の
中間よ了云るを。此ハ末よ廻し。其事を委曲よ云む為よ。
此よる省けるなり。彼詞ハ此國を安國と平く知食を御事
を專と立。此詞ハ今も荒び健ぶ神のあるよ當り了ハ遷却

ふ事ある故。荒ぶる神の言向を云ひ列ねて。即此詞の首尾を全くする故。その差異格別あり。天より降まつき給へる大綱を先づ此よかく云置。次は荒振神云々の事を演。小目とせるあり。○誰神乎先遣志波水穗國能荒振神等乎。神攘々平止氣武神議々給時尔。諸神等皆量申久ハ。下の神等を遣。惡神を事向給ふ御使は發しむる事を誰神を遣は善らむと。謀ち給ふる也。○天穗日之命ハ。天照大御神の御統玉を物實と。須佐之男命の吹生給へる命を云。返言とハ、使人の還て申言と云意。其使は係る言あり。さて此神の速りに返言不申事ハ、神賀詞の下

云べし。○健三熊之命毛隨父事也。此神ハ。天穗日之命の子あり。かせ父事と云。○天若彦毛返言不申ハ。さきよ天穗日之命と。其子健三熊之命とを。継々遣は給ひしと。國神の許ありて返言不申を又遣は給ひし也。○高津鳥殃亦依此立處尔身込支ハ。天若彦ハ。天降る後。大國主神の御女を妻よして。後ハ其大國主神の知らせる國をさへ棄んとして。八年よふるまで。返言申さざりしを。其所以を問ふ。雉を遣はさせしを。天若彦其雉を射殺しつせバ。天神怒りし。立處は射殺し給ひし事を。高津鳥の殃とハ云し也。○更量給也ハ。先は遣はし、天穗日之命の父子も返言申さば。天若彦ハ惡き意あり終は身亡ししを。更は改めし議呈給へる也。○經津主命健雷命

ハ。春日祭の下ニ云々。○荒振神等乎神攘々給比神和々給
比。語問志磐根樹立。草之片葉毛語止比。皇御孫之尊乎天降
所寄奉支。如此久天降所寄奉志。四方之國中。大倭日高見
之國乎。安國止定奉比。下津磐根尔宮柱太敷立。高天之原尔
千木高知比。天之御蔭日之御蔭止仕奉比。安國止平久所知
食。此詞どもハ。大祓詞の下ニ大概ハ出多り。總テ最初より
此所よりハ。紀記二典よりつきて。委ク知る處。さテ御蔭の
下ニ。天之御舎ミツカの事あるべきを。をい下へ廻マ。其用ある
所ニ置テ。爰コトハるク云テ其、天之御舎を造仕奉る事とを申
せる也。まテ安國止平久所知食武ハ。天神等の上、件ツの如ク。
此國の荒振神を言向けさせ給比。皇御孫、命の安國と平け
ク知食べく物一給へせバ。其御殿ミツカの内ニ於テ。其妨け奉る

事の無き筈の事ふせば。先ツ云々。下ニ神等の荒び
健び崇るるを述テ。其義を對ツせたる也。○天御舎之内
ニ坐須ハ。天皇の御殿ニ崇ツをまツ坐ツを神と云々。の事
なる。天御舎ハ。天上の物ハ凡テ美ツたく麗ツきを。其ニ擬ツ
物ツをも云。坐ツを次ニ荒備給比健備給比崇給云々とある。
その如く。天皇の大殿内ニ在ツを云也。○皇神等ハ。何
れ此神の御心ツも知らせぬ。あるが為。廣ク皇神等と
云るなる。○荒備給比ハ。上ニ荒振神等乎神攘々平ツ氣武云
云。荒振神等乎神攘々給比神和々給云々と見え。御趣
けニ對ツ云る也。○健備給比ハ。動作の一途ニ強ツ悍ツ。他
ニ顧ツる所なきを云。○崇給ハ。神等の御怒ツ時ハ。災異を
をも示し給ふ。此ハ荒振神の荒びをも。神の御心ニ怒ツ

すは事ありて。崇り給ふとハ云る也。○高天之原亦始志事
乎ハ。皇孫命の御世の次々。受給ひ保給ひて。天下に敷給ひ
行ひ給ふ大御政ハ一も。皇祖天神の御事依り坐る。神世の
古事に依りせ給ふ所なきを。殊に天社國社の皇神等を
齋き祭らせ給ふ御業を。高天原に事始り傳へさせ給
ふ所あり。崇神を遷却せしむ。申迫りて皇祖天神の始り
せ給ふ所なきを。あく高天原に始り事とい云也。○神奈我
良毛所知食也。惟神とハ神に坐をかまると云言也。こ
ハ高天原に事始め給ひ。神魯岐神魯美命の事依り奉り
給へるまふく。奉り行をせ給ふ事より其事の有べき状に
物に給ふ謂也。崇をふる神も神も坐バ。此天宮事を疾く
知食に辨へさせ給ふと也。○神直日大直日亦直志給ひハ。

その荒に健ひ崇り坐り禍事を。直り給ひてを遷り
却り其神の持罷り退給ひたり。○自此地ハ。天皇の御舎
の内を云。○四方乎見霧山川能清地ハ。高き處を云り。他の
祝詞に。皇神能見霧志坐四方國とあるハ。上天より此國を
見霧りし坐を云る也。此ハ山川の清き地より四方を見
齋きを云。○遷出坐也。其崇を為此地よりハ。山と川と
の清き地へ移り出り奉りまふく。出行りせ給へと也。○宇
須波伎坐せハ。主と其處を我物と領居るを云。波久ハ。
刀を佩く。沓を著くなどの波久と同じ。身も著り持意あ
らむ。○明妙照妙和妙荒妙亦備奉り祈年祭の下に云る。
○見明物止鏡。鏡ハ。向ひ見る料の物なせバ云る明ハ。物を
見り心を晴も也。○翫物止玉ハ。見めり翫弄也。○射放物

止弓矢ハ。弓を引放す。物を射るを云。○打断物止太刀。打断ハ討切多量。物を刈断つ故。太刀と名けたる。その用を云あり。○馳出物止御馬。馬ハ走出る料たる由あり。○砥戸高知。砥。腹満。雙。米毛。穎毛。山毛。住物者。毛乃和物。毛。能。荒物。大野原。尔。生物者。甘菜。辛菜。青海原。尔。住物者。鱒。廣物。鱒。狹物。奥津海。菜。邊。津海。菜。尔。至毛。横山。之。如。久。几。物。尔。置。所。足。尔。奉留。宇。豆。乃。幣。帛。乎。云々。安幣。帛。乃。足。幣。帛。止。平。久。聞。食。尔。上。よ。出。し。る。所。々。よ。云。至。て。米毛。ハ。和。稻。穎毛。ハ。荒。稻。よ。當。せ。る。なり。○御心毛明尔。明ハ。其。遷。却。ら。る。よ。依。る。幣。帛。を。も。奠多。ら。る。よ。衣。隈多。く。聞。食。る。也。○崇。給。比。健。備。給。事。無。之。山川之廣久清地。尔。遷出坐。神奈我良鎮坐。世ハ。神。多。の。ら。鎮。よ。神。よ。坐。を。任。よ。高。天。原。に。事。始。る。皇。御。孫。命。の。御。世。

御世行も世給ふ神事よる事を。明よ知食。崇給ひ健ひ給ふ事無し。山川の廣く清地よ。迂多。里。却多。き。給。ひ。其。地。を。主。領。き。坐。る。御。心。を。和。う。よ。鎮。里。坐。と。云。也。○此。一。章。の。意。ハ。高。天。原。よ。坐。る。万。の。政。を。始。給。ひ。二。柱。の。皇。祖。神。の。詔。命。を。以。る。天。安。川。原。の。高。き。所。よ。八。百。万。と。多。く。の。神。等。を。集。め。て。議。を。給。ひ。皇。御。孫。命。ハ。豊。葦。原。の。瑞。穂。の。國。を。安。國。と。平。く。所。知。食。と。皇。御。孫。命。の。大。坐。よ。天。國。の。堅。固。よ。御。座。を。離。る。よ。空。よ。重。き。雲。を。嚴。め。し。き。御。勢。よ。道。と。な。し。別。る。天。降。し。寄。し。奉。り。時。よ。誰。の。神。を。よ。づ。遣。は。し。瑞。穂。國。の。荒。振。神。等。を。攘。ひ。平。け。む。と。議。を。ち。給。ふ。時。よ。諸。の。神。等。の。謀。り。申。々。る。天。穗。日。之。命。を。遣。り。事。向。む。と。申。せ。バ。其。神。を。天。降。し。遣。り。た。る。よ。此。神。ハ。故。あ。り。報。申。さ。る。里。

いづば。其神の子。健三熊之命を遣はし。此神も父の事
に隨て。報と申さば。三度目よ遣はし。天若彦ハ。報申さ
るのみ多し。天神の御使を射殺つせ。天神の御怒よ觸
る身亡たり。是故よ天神の詔命を以て。更よ議を給はる。香
取と鹿島との二柱の神を天降し給はる。荒振神等を順ハ
ぬをバ討攘む。云。釋聞せし和し給はる。言ひし磐根少しの草
の葉を。語止しめ。皇御孫命を天降依し奉る。如此く
寄し奉る。四方の國の中央し。純高なる大倭國
を安國と定め給はる。其所の下つ磐根よ官柱を太し立。
虚空高く千木を上る。皇御孫命の坐す大官を造り坐る。
天を覆ひ日を覆ひし。安國と平らけし知食を。美た
麗ハしき大宮内し。荒び健び給は崇給ふ皇神等ハ。荒び

健び崇り給ふ事あり。高天原よ事始め給はる。天下よ
敷行し給ふ大政。殊よ天社國社の皇神等を齋き祭らせ給
ふ御業を。疾く知食せるよし。神直日大直日よ御心を
直し給はる。皇御孫命の御殿の内より。四方を見晴るもべ
き。山川の清地よ遷出する。神等の地よ主し領させ
と。進る幣帛ハ。絹布の麗しきを備奉る。鏡玉弓矢太刀御馬。
すく御酒御饌海山川野の種々の物も。如横山く敷多
く机物よ置足ハし奉る。嚴し大なる幣帛を。事故あり
闕落る事あり幣帛と。平よ安くに聞食し給はる。崇り給は
健び給ふ事あり。山川の廣く清き所よ迂り却き
る。其地を主領し。御心も安らる。鎮しすを。稱辭
竟奉ると申とあり。

○遣唐使時奉幣

此祭ハ。臨時祭式。開遣唐船居祭住吉社

とあり。又開船居時。神祇官差使。向社祭之とあり是也。

皇御孫尊乃御命以茲住吉稱辭竟奉留皇神等乃前申賜

大唐山使遣位年為依船居無播磨國船乘為使者

遣佐年所念行聞皇神命以茲船居波吾作教悟給此教悟

給北那我良船居作給波部悦備嘉美礼代乃幣帛乎官位姓名

令捧賚進奉申。

皇御孫尊乃御命以茲ハ。春日祭の詞。天皇我大命亦坐世

と云るが如し。○住吉稱辭竟奉留皇神等ハ神代紀。伊

弉諾尊筑紫日向の檣原身楔坐一時生給へる底筒男中

筒男表筒男の三柱を申す。神名式。攝津國住吉郡住吉坐

神社四座とありハ。後ハ神功皇后を齋奉せハまる。さる。

此祭を住吉行ふ事ハ古事記。韓國御言向の時の御諭

言。是天照大神之御心者亦底筒男中筒男上筒男三柱大

神者也云々。我之御魂坐于船上而云々。可度ハあり如く。彼

韓國を歸せ給ふと。天照大神神の大御心と專ら此住吉

大神の執行をせ給ひ古事のあり故。徒ハ船路の守護

のみあり。凡ハ外國の事。此時より始め預給ふ所謂

阿多ガ故あり。ハ新羅を平竟歸給へる段。爾以其

御杖。衝立新羅國主之門。即以墨江大神之荒御魂為國守神。

而祭鎮還渡也。とありを知る。○使遣佐年ハ遣唐使

をあり。○船居ハ湊船を留め置處を云。○播磨國利船乘

為ハ上使遣さむある大御使の播磨國より船乗一

了。其船居を開き渡るを云あり。○所念行間ハ天皇の也。

○教悟給比那我良ハ。神隨カミツラのウラ等ト。教悟ケイツ給ル。云々。○船居作給波部ハ。其の頃津の國の湊塞ササせる事あり。播磨の津より發タむと議カり給ル。○神の御誨サシあり。忽タ船津の開け事と見え。○礼代レハ。教ケイツよひ報賽カキ事代ハ。よひ奉る物實モノを云。○此一章の意ハ。皇御孫命の詔命を以。住吉ヌミヤ稱辞竟奉る。皇神等の御前ミマ申給ル。唐土モリ大御使を遣ハさむと為ス。船を留め置く。湊ミナトよきと依る。播磨國より船乗フネノリ。其船居を聞き渡ワタ。大御使ハ遣ハさむと。天皇の念オモ行ハを問ト。皇神の御言コト以。船を留め置く湊ハ。吾作ウてむと教悟ケイツ給ル。任マカ津の國ハ船居作り給へ。悦ウレ。嘉カ。報賽カキの物實モノの幣帛ヘイを。官位姓名クワンイセウメイよ捧持テ。進マると申スとあり。

○出雲國造神賀詞出雲國造者。魏。其の臨時祭式出雲。國造クニツクリ任マカ後。國クニ還マ潔齋ケツサイ事一年トシ。國司クニツカサハ國造及諸祝部等を率ヒ京キョウ上ノ。神壽詞カミイフを奏ウタ。又後齋一年トシ。再マタ入朝ニウテウ。神壽詞カミイフを奏ウタ。初ハジメの如ニ。此コノ神壽詞カミイフを奏ウタ。神祇官長カミツカサ自ら監視ミヤカシ。預め吉日ヨクニチを卜ウラ官ツカサ申ス。奏聞ウタヒ。所司ツカサ宣示ノリとあり。委マカハ本書コノチを披ヒ見ミるべし。

八十日ヤソ波ハ在シ。今日ケ能ク生ム。足タ日ヒ。出雲國造出雲國造姓名ウツノミヤツクリノナニガシ。恐カシ美ミ。申賜ウタヒ。挂カケ。畏カシ。岐カシ。明御神アカミカミ止ト。大八島國オホヤシマノクニ所シ知シ。食須ケ。天皇命スメラミコト。乃ナ大御世オホミヨ乎ヲ。手長テナガ。大御世オホミヨ止ト。齋イハヒ。若カ後ノチ。齋イハヒ。時トキ。為シ。出雲國ウツノミヤ乃ナ青アヲ。垣山カキヤマ内ウチ。下津シタツ石根イソネ。宮柱ミヤハしら太敷タシキ。立タテ。高天原タカマノハ。尔ニ千木チキ高知タカチ坐イマ。須ス。伊射那伎イサナギ乃ナ日真名子ヒマナゴ。加夫呂伎カフロギ熊野クマノ大神オホカミ。御氣ミケ野命ノミコト。國作クニツクリ坐イマ。

志大穴持命二柱神乎始天百八十六社坐皇神等乎某甲我弱
肩尔太禰取挂天伊都幣能緒結天乃美賀秘冠天利伊豆能真屋
尔麤草乎伊豆能席登刈敷天伊都閉黒益之天能厖和尔齋許
母利志都宮尔志静米仕奉朝日能豊榮登尔伊波比乃返
事能神賀吉詞奏賜登波久奏
高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命尔天下大八嶋國乎事
避奉之時出雲臣等我遠祖天穗比命乎國體見尔遣時尔天能
八重雲乎押別尔天翔國翔尔天下乎見廻尔返事申給久豊葦
原乃水穗國波畫波如五月蠅水沸夜波如火光神在利石
根木立青水沫毛事問天荒國在利然毛鎮平天皇御孫命尔安
國止平久所知坐申尔命兒天夷鳥命尔布都怒志命乎
副天降遣天荒留神等乎撥平氣國作之大神呼媚鎮天大八

島國現事顯事令事避文乃大穴持命乃申給久皇御孫命乃靜
坐牟大倭國申天已命和魂乎八咫鏡尔取託天倭大物主櫛
玉命登名乎稱天大御和乃神奈備尔坐已命乃御子阿遲須伎
高孫根乃命乃御魂乎葛木乃鴨能神奈備尔坐事代主命能御
魂乎宇奈提尔坐賀夜奈流美命乃御魂乎飛鳥乃神奈備尔坐
天皇孫命能近守神登貢置天八百丹杵築宮尔静坐支是尔親
神魯伎神魯美乃命宣久汝天穗比命波天皇命能手長大御世
乎堅磐尔常磐尔伊波比奉伊賀志乃御世尔佐伎波閉奉登仰
賜志次乃隨尔供齋若後齋時仕奉朝日乃豊榮登尔神乃礼
自利臣能礼自登御禱乃神寶獻尔久奏白玉能大御白髮坐赤
玉能御阿加良毗坐青玉能水江玉乃行相尔明御神登大八嶋
國所知食天皇命能手長大御世乎御横刀廣尔誅堅米白御馬

○祝詞正解下

能前足爪。後足爪踏立事。渡大官能内外御門柱乎。上津石根。踏堅米。下津石根。踏凝之。振立泥事。波耳能弥高尔。天下乎。所知食事。志太米。白鵠乃生御調能玩物。登倭文能大御心。毛多親尔。彼方能古川岸。此方能古川岸。尔生立。若水沼间能弥若。御若散坐。須須伎振速止美乃水乃。弥乎知尔。御素知坐。麻蘓比乃大御鏡乃面乎。意志波留志天见行事能已登久。明御神能大八島國乎。天地日月等共尔。安久平久知行事能志太米止。御禱神寶乎。擎持。神礼自利臣礼自登。恐弥恐。天津次能神賀吉詞白賜。登久奏。

八十日日ハ。八十來經よ。大抵其月の中は數多ある日數を云。○今日能生日能足日ハ。日ハ多くらむ。其中よ今日ど吉日と壽稱へ云也。神祇官よりト相る日を奏聞

せる其當日を云ふ。○出雲國國造ハ。國造本紀よ。出雲國造瑞籬朝。以天穗日命十一世孫。宇迦都久怒。定賜國造と見え。天照大御神の御子。天穗日命。二柱皇祖神の勅命の任よ。此葦原中國を言向よ。天降坐。大國主神の御許よ。坐々。香取鹿島の神等の天降坐。待給ひ。内外より力を協せ給ひ。大國主神を鎮め和し給ひ。終よ高皇產靈大神の敕命の任よ。彼神の祭祀を主里給ひ。永く出雲國よ留坐。其國の國造よ。大社の神主あり。今ハ千家北嶋兩家の祖先よ坐あり。國造と。諸國よ其國の上と。其國を治る人を云尸あり。造とハ御臣と云義あり。○挂久毛畏岐ハ。言よ掛け了申も畏きあり。○明御神止ハ。天皇ハ今現よ世よ御坐よ。御神と申を言よ。止ハ。尔天と云

むが如し。○大八島國より手長能大御世ハ。龍田祭と祈年祭との下よ云々。○齋止ハ。出雲國造が遠祖。天穗日命ハ大國主神の祭祀を為しめ給ひる。皇御孫命の大御世を長く遠く齋しめ給へる。天神の御旨に依る。殊更ハ國造に任らせたる始。其次弟を受賜せる初ハ齋為る祈奉るを云る。式ハ國造還國潔齋一年とある間の所作あり。○後齋時ハ還國之後ハ又齋一年とあるを云。○青垣山とハ。垣の如く青山の田に立るを云。○下津石根本宮柱太敷立也。高天原亦千木高知ハ。祈年祭の下よ云々。○伊射那伎乃日真名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命とハ。須佐之男大神を申さる。此大神ハ書紀に珍子とあり。殊ハ勝せる御子なり。故ハ日真名子と申さ。日ハ日子の日よ同く。真

名子ハ實の子と云々。愛の言あり。加夫呂伎ハ神祖あり。須佐之男大神ハ大名持命の祖神に坐す故。出雲國よりハ。殊ハかく申し。櫛御氣野命とハ。此大神の熊野宮に鎮座し御靈を稱へ奉る御名あり。○國作坐志大穴持命とハ。二柱御祖神の修理固成ハ國土の未と成整ハざり。處あり。此大神の少名彦名神と共に作固給へるを以る。國作坐志と申さる。大穴持命ハ。出雲大社に鎮座す大神あり。○百八十六社。神名式ハ。出雲國一百八十七座とある。榊築熊野の兩神宮をも列ねたる員数あり。此ハ百八十六社とあるからハ。延喜より以前。奏神壽の事ハ一度の事あるべし。風土記ハ。合神社三百九十九所。一百八十四所、在神祇官。二百十五所、不在神祇官とある。

バ。此詞よるハ二社加たり。神名式よるハ三社増加したる
あり。○皇神等乎ハ。何の神をも尊とてよく申さる。乎と
云辞ハ。下よ志都宮ル志静米とある所へ係せ。○某申ハ。
姓名と書む。かく書る。あゝ。よ。ハ姓をバ申さ。唯
名をる。申を故あり。○弱肩ル太禰取挂ハ。祈年祭の下よ
云。○伊都幣能緒結。伊都ハ。何よませ齋清めある物よ云
言ふ。幣ハ。さ。木綿を云。あ。ベ。又木綿と麻とよ
るもあ。緒とハ。即ち木綿麻あり。常よ麻を素と
云。結と。國造の頭の髪よ結着るを云。謂ゆる木
綿鬘も。云。云。○天乃美賀祕冠ハ。祕ハ氣の
誤ある。天の御蔭登冠。かの木綿を頭よ着る。出
と。御殿の事を天の御蔭日ハ御蔭と隠り坐と云

る如く頭の蒙る物をも文よ。ハ云る也。○伊豆能真屋。
伊豆る。嚴重よ忌清たる意真屋ハ齋屋よ。國造の齋館の
中よ。御饌御酒を調る屋を云。○鹿草ハ。人氣よ
穢せぬ速き野山の草を用る故。あら草と云。神
事よ用る薦を。荒薦と云。如。○伊都閉黒益之。伊都閉ハ。
嚴瓮ある。黒益を借字よ。令黒あり。薪よ焼バ黒くある
を云。飯よ焼とを斯云。○天能厩和ル齋許母利也。厩
和ハ。厩よ和よ別よ意ある。あ。三輪の輪と同一。三
輪よ御酒を醸る厩の事あり。さ。此ハ。御酒の厩一を云。
其餘の種々の御食つ物をも無る。文あり。伊都閉黒
と云。御酒のみの用よ非。御食物よ煮炊くを云。其
續きの文あるを以知べ。齋許母利と云。爾

ハ。御食御酒あどを調へちどし。其事は齋をると云也。
嚴の真屋は籠るあり。天ハ。天の物は美しきも擬作せざるを
とす。添云るも此也。○志都宮ハ。神を鎮め奉る宮と云事也。
さる此宮を。上よ云々皇神等乎とあるを續きて。彼神々
を請奉る宮なり。されバ此宮ハ常の宮ハあり。此齋の
為は新に造るぬる。○志静米仕奉るハ。上よ舉たる熊
野杵築の二柱の大神を始め。多くの神々を志都宮は鎮
め坐しめ。一年の齋の間仕奉るを云なり。古を逆の文を。
國造は任を其國は還る。齋為一時の事を云也。○朝日熊豊
榮登ハ。朝廷は参向。神壽詞を奏を時を云なり。臨時祭式
ハ。國造奏神壽詞。日平且。神祇官試國造奏事云々とあり。
朝の間なる故は斯ハ云なり。○伊波比乃返事熊神賀吉詞

奏賜登久奏ハ。初は召上らせり。位と負幸物を賜り。大神
等を齋奉り。天皇の御世を賀奉ると云詔命をうけり。其事
仕奉る齋の竟りつせバ。彼大御言の復命を申を。神賀
吉詞奏とハ云也。是より此吉詞の序の如し。さて天皇本
紀ハ。天種子命。奏天神壽詞。即神世古事類是也と見え。此
此ハ中臣壽詞の事なる。如此臣連の家々は傳へたる。神
世古事の有を。朝廷は参り聞え上る詞を。余基登とハ云。
さる皇御孫命の天降坐。初國知食を始。當今仕奉る
臣連の祖々ハ。何れも其事は功。仕奉る。勲功は神
は坐が故。其勲功を發呈を事ハ。子孫の人々の。其餘慶あ
る。滋養居るの。其先祖の勲功は資。天日嗣の
終古無究は。定り坐る御事なる。上下は通。其甚々め

たき神世、古事ある故に。余基登と云號ハ出来たりあり。○
高天熊神王ハ。天祖と云むが如し。高天ハ。天原の處とあり。
常ニ高天、原と云せむ。然あるべきを。高天とのみ云るハ。天
上の事ハ用ふく軽く。天と云る事足らぬべき所なれば
あり。○高御魂神魂命。天下大八島國ハ。上ニ出たる所
ニ云る。○事避ハ。決りて事依の誤字あり。此、文ハ。高御魂神
魂命の大八嶋國を。皇御孫命ニ事依奉り時と云事ありを
なり。○出雲臣ハ。當時の國造の氏尸あり。○國体見ハ。下、國
の有さよ見せし降し給ふよる。をべし荒び健ぶ諸神の様
を見る。治め從へつべきや否やを見たり。事を成む為也。
凡そこの事の有様を。加多と云。○天熊ハ。重雲乎押別也ハ。
大被詞。千別尔千別也と云が如し。○天翔國翔也天下乎

見廻也ハ。鳥などの飛翔る如く。虚空を往來し給はる。此、國
の状を見廻し給へるを云。○豊葦原乃水穗國ハ。大殿祭の
下ニ云る。○如五月蠅ハ。五月おろの蠅の如く也。其項珠
此、虫ハ多るれば譬へたる也。○水沸ハ。皆涌の借字あり。○
如火瓮光神。火瓮ハ。瓮の内より焼猛火を云。此、猛火の如く
圓々としたる火珠と化す邪神の荒振を云あり。○木立ハ。
凡そこの植物を會めて云るあり。○事問ハ言問あり。○荒國
在とハ。荒振國ニ在る也。○然毛鎮平天皇御孫命尔安國止
平久所知坐_之申也ハ。三年餘の間。大名持命を漸ニ媚
和_ハ。遂ニ時をかりて。天ニ歸り上り。二神を申し下
る。平けたる也。○已命兒天夷鳥命尔布都怒志命乎副天天
降遣天ハ。此、詞ハ。荒ふる神等を撥平する事あり。大國主、神

を媚鎮めたる方。全文より其用重き故。天夷鳥命、
布都怒志命乎副天と續けたるより。出雲國造が。已が祖
神たるを以て。私に他神を誣たるは非也。偕あるは健
御雷命を略けるハ。古事記よ。布都主神を略けるは同ト。○
國作之大神毛乎媚鎮天乎毛の詞ハ。荒ふる國神を言向は天
降し給ふ事の因。此大神を媚鎮めたる。此國を事避奉ら
るめ給ふ也。媚ハ。大國主神の御許に依親と給ふる。其御心
を損ねさせ給はんと。程よく會釋む給ふを云。○大八島國
現事頭事。大八島ハ物あり。現事頭事ハ事あり。大穴持命の
主領き所有せ給へり。物と事と二つものら事避。皇御孫
命に献らしめ給へり也。○靜坐牟大倭國申天ハ。此程ハ。
猶未皇孫命の大和國に宮敷坐さし時ある。此大神の

如此し詔へるハ。彼國ハ固より後皇孫命の宮敷坐へ
き地と。彼國作の時より。心よ會て作を設給へるあるへ。
○和魂とハ。神よまを人よまを。自ら和み靜ふる御魂を
云。徳用を云名あり。○八咫鏡ハ取託託ハ付の意。其
和魂を此鏡に寄憑給へる由あり。○倭大物主櫛玉命登
名乎稱天。大物主と申さハ。三輪ハ限りたる御名あり。櫛玉
玉命も。三輪に鎮坐す御魂を稱へたる御名より同ト。さて
神名帳よ。大和國城上郡大神大物主神社とあり。○神奈備
と。神の毛理と云ふ同ト。○坐ハ。令坐あり。さて此大物主
神の。大三輪に鎮坐する由縁ハ。此神の御託よ。既く祭を
給へる事あるを。是より後ハ。皇孫命の近守神と立奉り給
へる故。已命の御魂ふかき。別稱名を奉り。新よ八

咫鏡を御魂代とて。鎮祭を給へる由也。○已命乃御子ハ。次々の三、名は係せり。○阿遲須伎高孫根乃命乃御魂乎葛木乃鴨能神奈備坐ハ。神名帳ハ。大和國葛上郡。高鴨阿治須岐託彦根命神社四座とある御社是あり。○事代主命能御魂乎宇奈提坐ハ。神名式ハ。高市郡高市御縣坐鴨事代主、神社とある御社是あり。○賀夜奈流美命乃御魂乎飛鳥乃神南備坐ハ。神名帳ハ。高市郡。飛鳥坐神社四座とある是あり。○皇孫命能近守神登貢置天ハ。其京城の近守神とて。大穴持命の和魂。及御子神たち三柱の御魂を。出雲國より大倭國へ。國避の今。貢置を鎮しめ給へる由也。○八百丹杵築宮。八百丹とハ。多くの土を云。を杵して築と云うけり。杵築ハ。今も大宮の在る地名あり。○天皇命能

手長、大御世乎。堅磐坐常磐坐伊波比奉。伊賀志乃御世坐佐伎波閉奉ハ。祈年祭の下よ云々。○仰賜志次乃隨坐ハ。彼大穴持命の祭ハ。穗日命の為べきものと。皇祖神の宣ひしハ。大穴持命を敬祭す。且御孫命の御代をも。速く祈奉らむ為あり。事此、詞よ明あり。仰ハ。負せと同言し。其事を負持しむる由あり。次とハ。天穗日命より國造の次々坐奉る云。下よ天津次とある由之と同ト。此言次ある御禱乃神寶獻登久奏とあるへ係せり。さす仰ハ。親神魯伎神魯美乃命宣久とある。宣字を受たるとあり。○供齋仕奉坐ハ。前よ手長能大御世止齋止為坐とあるよ應へたる文あり。○神乃礼自利。礼自利ハ上の詞よ礼代とあるよ同ト。大國主神。國避坐し時。其礼實の物を。天穗日命よ託す。其大神の皇

孫命の大御世を。手長の大御世と。齋ひ奉り給ふ表は獻り
給へるを。天、穗日命の復奏し給ひし時よ。天、朝廷よ警奉り
し例よ擬ひる。其裔の出雲國造。熊野杵築の二所よ供奉
す。其大神等よ奉る神寶を申下し。大神の禮實とくく
獻るを以いふ也。○臣、熊禮自ハ。國造の獻る禮代也。利を省
くハ。唱る調の爲もやあむ。右の如く神の禮實ハ。大國
主神の。此、國土を皇孫命よ避奉らせ給ふ表物あるが。其よ
並べ。穗日命より奉り給ひしハ。所謂臣の禮實あるが。此
二を合せ。其裔の國造より。御代々々朝廷よ神賀吉詞奏
る禮實ハ。捧げ奉るものと見ゆる也。○御禱乃神寶獻久
止奏。かく申す次々其獻物を詞し賀申さる。○白玉
能大御白髮坐ハ。此白玉の如く大御白髮の生給むむ。

御壽長く大座さむと禱白せるも。下の赤玉能青玉能
ふどの能も如字の義也。○赤玉能御阿加良毗坐ハ。他の祝
詞よ。豊明亦明坐。さく赤丹穗もどく同く。大御顔を申す。赤
良毘ハ。赤らむと云ふ同。○青玉能水江玉乃行相亦。水江
玉ハ借字よ。稚の可愛玉も。行合ハ。緒よ貫たる玉と玉
と。相並び着しる所を云。此玉もとの相連る。並び着たる
さよの。さく調ひる乱せざるが如く。天下を整へ治め給
ふ由よ譬たり。○明御神止ハ。天皇を。世よ現し坐す御
神よ。と云意よ。書紀よ。現人神と申も同し意也。止是。
尔氏と云むが如し。○大八島國所知食。天皇命能手長大御
世ハ。上よ出たる所々よ云。○御横刀廣尔誅堅米ハ。上の
手長よ對へる。廣と文あり。太刀よ。十握劔もど云ハ。長

さを計りて云。尾羽張ふと云ハ。其、鋒の張廣ぶせざるを云。廣矛
など云ル。是は同ト々せば。其横刀の長く廣きを以。譬とハ
せるあり。誅堅ハ。御横刀を打鍛ひ堅めたる如く。大御身堅
らば大坐す。大御息内の長く速く。天下を知食と也。○白御
馬能前足爪後足爪踏立事波ハ。その献物の白馬を。神賀言
を奏を庭より引て参る事を云。踏立と云。踏行く事とある
あり。○大宮能内外御門柱乎ハ。皇宮の内、重外、重御門々々
の柱より。其、馬の踏る過行く所を以て云也。○上津石根ハ
踏堅米下津石根ハ踏凝之ハ。上より云下りたる意ハ。祝詞
よ。下津岩根ハ宮柱太敷立ふと。大宮造の堅固ある事を讚
申せる。其、意味を以て。馬爪より柱根の地を踏堅め凝ると
賀たるあり。さる上津石根と下津石根と並べたるハ。文の

章をよせざる也と雖も。言意ハ。此大地上より地底の際限ま
るものと云也。○振立流事波ハ。耳なれども。耳と云ざるハ。即
て次より耳能とある故あり。耳能ハ。此、馬の耳の如と云意也。
○耳能弥高ハ天下乎所知食ハ。馬耳を高く立ぶ物ある
故也。弥高と云ふ。高天原ハ千木高知と云ふ。高き由あり。
此ハ弥高と云む料のこより。此、馬の耳は高きが如くふと
云る也。さる天皇の天下知、食を弥高よと云ハ。御代の弥益
益は隆盛ある由也。万葉ハ高殿を高知、坐すなど多くある
也。宮殿は係る。盛は知食を事を云ふあり。○事志多米ハ。下
見えよとこの下形の頭を見えしるを云。今世の言ふも
下地下づくろひふと。都る物の基。うねりの設けを下基と
云事多し。見えを米と云ハ常あり。或説は下為の畧也。今俗

よ下ありらへふと云意の語あるなりと云里。何せよとも
有なり。○白鶴乃生御調性玩物ハ。白鳥を生あるら籠よ
免る。御玩よ献る也。此、鶴を獻る事ハ。垂仁天皇の御子。本牟
智別命。御年三十よ至る迄言ひ給ハざり。鶴を見て初
言ひ給ひ。其、鳥を出雲國よ捕り献る事あり。○倭文能
大御心毛多親ハ。倭文能。古のよき布よ。筋を織たるあり。志豆とハ。即須遲といふ
事なるなり。今いふ縞布也。多親ハ。倭文能云る
意ハ。彼布の筋の鮮よ。慥よ分せとあり。如く。天皇
の大御心た。よ坐々せと也。○彼方能古川岸此方能古
川岸ハ。古川の彼方此方の岸と云事あるを。文よ古川を二
に分る云るあり。○若水沼間。若の水沼間ハ。久留須を誤

せるなるなり。久留須る栗林あり。さる献る物の中。栗は
あるよつきての壽詞なるなり。○祢若叡ハ。御若
叡坐。若えハ。若やぎの古言あり。○須々伎振速止美乃水乃
弥乎知ハ。御乘知坐。須々伎振ハ。滌振よ。振滌と云よ同ト。
其、内あり。振と云事重き故よ下よ置里。振ハ動り流を云
る。滌ハ状あり。速止美ハ。淀あり。國造の襖袂より始る。其、献
る種々の御贄を。此水よ振滌ぎ。清むるあり。乎知とハ。
何よませ初の方へ歸るを言よ。老たる人の若かへ
るを云里。若やぎ彼川よ。身よませ物よませ。滌ぎ振ハ。
其、勢よ流る。水の淀と。上の方へや歸る。其、勢よ
を。弥乎知と云る。天皇の弥乎に若うへ坐む事よ申せ
るなり。川水ハ上より流來る物ある故よ上の方へ歸る

給ふハ。豊葦原の瑞穂國ハ。晝ハ五月頃の蠅の如くハ皆涌
上リ。夜ハ猛火の如くある光る邪神あり。石根も木も青き
水沫も言ひて。荒振國よてあり。然せども鎮め平けて。皇御
孫命よ。安國と平けく知し坐しめむと。己命の兒。天夷
鳥命よ。經津主武甕槌の二神を副て。天降遣し。荒振神等
を撥ひ平げ。大國主神をも媚鎮め。大國主神の主領き有
るせ給へ。大八洲國をも現事頭事をも。皇御孫命よ。獻
らめき。其時大國主神の奏し給ふ。皇御孫命の。後々鎮
坐べき大倭國よ。己命の和魂を八咫鏡よ寄憑て。倭大物主
櫛玉命と御名を稱て。大三輪の森よ坐させ。御子神。阿遲
須伎高孫根命の御魂を。葛木郡高鴨の森よ坐させ。事代主
命の御魂を。高市郡雲梯よ坐させ。賀夜奈流美命の御魂を。

高市郡飛鳥の森よ坐させ。皇御孫命の近き守護神と貢
呈置。杵築宮よ静坐させ。是時ハ二柱産靈大神の宜ふ。汝
天穗日命ハ。天皇命の弥足ひる長き大御世を。堅磐の如
く常磐の如くよ祝ひ奉る。嚴く大なる御世よ幸へ奉せ
と。其事を負持しめ給ひ。國造の次々仕奉来し。齋
齋ちして祈り仕奉る。朝日の麗く外る時。神の礼実臣
の礼實と。御禱の神寶を献る。其獻る白玉の如く。大御
白髮生給もむまご大御壽長く大坐々む。赤玉の如く。大御
顔の麗く赤らみ。青玉の稚の可愛玉の行合の如く。
調ひる乱ざるが如く。天下を整へ治め給ひ。明御神
と大八洲國知食を。天皇命の足ひる長き大御代を。御横刀
の長く廣く打鍛ひ堅めたる如く。大御身堅うに大坐。大

御壽の長く遠く。天下を知食。大庭より白御馬を率参る道
み。内外の御門々々。其柱の根を地底の際隈まで。踏堅
め踏凝し。振立る馬の耳の如く。御世ハ弥益々隆盛は高
く。天下を知食さむ事のまぐめ。まぐ白鳥を生あがり献る
玩物と。古のよき布の筋の如く。天皇の大御心慥は坐々。
彼方北方の古川岸より生立る若栗林の如く。弥若やき御
若やぎ坐。此献る物を振滌ぐ淀の水の如く。弥若やき御
へり坐。塵をふるも曇り。隈なく澄明ある大御鏡の面を。
押晴うし。看るぬる事の如く。現人神の知食は六八
洲國を。天地日月と共に。長く遠く安く平けく。知食さむ事
のまぐめと。御禱の神寶を擎持る。神は己との礼実と。恐
れも。天穂日命より傳るる来り。次るのまぐめ。神賀の吉

詞を白給ふと奏まるとあり。

○中臣壽詞 是を中臣上祖天兒屋命。高千穂宮より。大嘗
の大政を行はせ給ふ時。奏まるとあり。次々相傳る。天神
の壽詞を稱申さるは。其中臣の氏人。此奏る壽詞と云
意味あり。此を天神の壽詞と云事ハ。皇祖天神の大
御命を受傳へ奏ま由ある事云も更なるが。是を同ト神
語の中より。皇御孫命の天津日嗣の高御座。即せさ
せ給ふ初より。天地と日月と共に。照し明らし御坐る。齋
庭の瑞穂を聞食む事。皇神の御中。皇御孫命の御中執
持る。中臣の仕奉る事を。言壽を申述るが故。天神壽詞
と云。殊よき壽詞と云るあり。

現御神止大八島國所知食須大倭根子天皇我御前告天神乃

壽詞遠稱辭定奉止良久申須
高天原仁神留坐須皇親神漏岐神漏美乃命遠持天八百萬乃
神等遠集倍賜天皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穂乃
國遠安國止平久所食天都日嗣乃天都高御座仁御坐天
天都御膳乃遠乃長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穂遠平
安由庭仁所食止事依志奉天降坐之後仁中臣乃遠都
祖天兒屋根命皇御孫尊乃御前仁奉仕天忍雲根神遠天乃
二上仁奉上神漏岐神漏美命乃前仁受給里申仁皇御孫尊
乃御膳都水波宇都志國乃水都天都水遠加氏奉申事教
給志依天忍雲根神天乃浮雲仁乘天乃二上仁坐氏神
漏岐神漏美命乃前仁申渡天乃玉櫛遠事依奉此玉櫛遠刺
立氏自夕日至朝日照天都詔戸乃太詔刀言遠以氏告礼如

此告渡麻知渡弱蒜仁由都五百箇生出車自其下天乃八井出
幸此遠持天都水止所聞食止事依奉支如此依奉志任仁
所聞食由庭乃瑞穂遠四國ト部等太兆乃ト事遠持氏奉仕氏
悠紀仁近江國野洲主基仁丹波國冰上遠齋定物部乃人等
酒造兒酒波粉走灰燒薪採相作稻實公等大嘗會乃齋場仁持
齋波參來氏今年十一月中都卯日仁由志理伊都志理持恐美
恐美清麻波利仁奉仕利月内仁日時遠撰定氏獻留悠紀主基
乃黑木白木乃大御酒遠大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳
乃遠御膳止汁實赤丹乃穗所聞食氏豐明仁明御坐氏
天都神乃壽詞遠稱辭定奉留皇神等母千秋五百秋乃相嘗仁
相宇豆乃比奉利堅磐常磐仁齋奉利伊賀志御世仁榮志奉利
自康治元年始與天地日月共照志明御坐事仁本末不傾

○祝詞正解

茂槍乃中執持奉仕留中臣祭主正四位上行神祇大副大中
臣朝臣清親壽詞遠稱辞定奉申
又申久。天皇朝庭仁奉仕留親王等王等諸臣百官人等天下四
方國乃百姓諸集侍見食倍尊食倍歡食倍聞食倍天皇朝
庭仁茂世仁八桑枝乃立榮奉仕倍倍禱乎所聞食止恐美恐美
申給波久申。

現御神止大八島國所知食須ハ上の神壽詞の下に云里。○
大倭根子天皇根子の根ハ多の土着せる國土を云る。島
根國根あどの如く。子ハ其地よ坐るを以。然稱へ奉れる
ガ。何時となく。尊稱とハ成せるものぬる。○天神乃壽
詞ハ。次よ皇御孫尊波高天原尔事始天より。瑞穗速平久安
久由庭仁所知食と云道を云也。○稱辞定奉久。稱辞ハ。此天

神壽詞ふる。と。右文より明ふる。定奉とハ天神の仰授け
給ふ大御詔を奉りて。此詞を仕奉るると云ふとあり。○高
天原仁神留坐須。皇親神漏岐神漏美乃命速持天。八百万乃
神等速集倍賜天皇孫尊波高天原尔事始天豊葦原乃瑞穗
乃國遠安國止平久所知食天。天都日嗣乃天都高御座仁御
坐天ハ。上よ出る所々よ云里。○天都御膳遠ハ。天神の事
依一奉里給ふ瑞穗を以。仕奉る御膳ふる。故よ。遠といふ
辞を用らせと。○長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁ハ。
上よ出たる所々よ云里。○由庭ハ齋場よ。大嘗官を云也。
○所知食とハ。上よ安國止平久所知食より相對へる。全と
ハ御國を知食と御事を兼併せると云所ふる。故よ。所聞食
とハ云る。所知食と云ふ。○天忍雲根神ハ天兎屋命

の御子あり。○天乃二上ハ。天御國よある山名あり。○奉上
天ハ。天兒屋命の事教る。皇御孫命の水取の大御使。立奉
里上る由あり。○受給_里申_仁ハ。皇御孫命の御膳津水_ツ仕
奉らむ。天津水を受賜_も令_シ給ふ也。此ハ。天忍雲根神遠神
漏岐神漏美命乃前仁受給_里申_仁。天乃二上仁奉_上。と語
を次第_{ツイデ}見せば。能く通ゆる也。○皇御孫尊乃御膳都水ハ。
皇御孫命の大御膳仕奉る。所聞食む水を云也。○宇都
志國。宇都_ツハ。現志_ハ。長々_{ナガク}夜を。長々_{ナガク}夜と云類も。現
しき國と云ふとあり。○天都水ハ。天上の水と云ふとあり。
○加_カ奉_年申_止事教給_仁依_依ハ。大同本紀。天忍石乃長
井乃水乎取_リ八_ハ盛_{モリ}天_ニ誨_シ給_ル久_ク云々。遺_遺水波_波天_ニ忍_忍水止_止云_云天_ニ食_食國
乃水_水於_於尔_尔灌_灌和_和天_ニ献_献初_初と見えたる如く。現_現國の水_水天_天都

水を加_加奉_奉らむ。天津水を授_授賜_賜へと御祖の神等よ
申せと。天兒屋命の事教給_給り。依_依と云ふ也。○天乃
浮雲仁乘_乘ハ。常陸風土記。乘_乘白雲_{白雲}還_還昇_昇蒼_蒼天_天も有_有。神
等の天より降_降給_給ふハ。磐_磐船_船乘_乘給_給ふ也。地より天よ上_上
給_給ふハ。必_必雲_雲乘_乘給_給ふとあり。○天乃玉_玉櫛_櫛櫛_櫛ハ
串_串の借_借字也。玉串_{玉串}ハ。玉を飾_飾着_着るより出_出たる名_名あり。玉を
着_着ざるも。美_美稱_稱ハ玉串_{玉串}と云_云。○事_事依_依奉_奉而_而ハ。忍_忍雲_雲根_根神
よハ授_授給_給へど。實_實ハ皇_皇御_御孫_孫命_命の事_事依_依給_給ふ故_故。奉_奉とハ有_有也。
○刺_刺立_立ハ。土_土の刺_刺立_立也。○自_自夕_夕日_日至_至朝_朝日_日照_照ハ。夕_夕日_日の降_降
る其_其夜_夜を_をみ_みら_らる。夜_夜明_明る朝_朝日_日の昇_昇る_を云_云。○天_天都_都詔_詔戸_戸
乃_乃太_太詔_詔乃_乃言_言速_速以_以告_告礼_礼ハ。大_大被_被詞_詞も。同_同ト_ト辞_辞あり。彼_彼も此_此
も。共_共よ其_其太_太詔_詔戸_戸言_言ハ。別_別よ傳_傳へ給_給り。故_故。此_此よ漏_漏あり。

○麻知波ハ。太詔詞を告つ。夕日より朝日照る。待ふを
と敷ふ。○弱菴ハ。弱菴の借字。正午時より前を云
べ。至朝日照とある。連きの時刻あり。○由
都五百菴。由都ハ。伊都の義。清淨き五百菴の生出る義
あり。○自其下天乃八井出牟とハ。其化出たる菴の下より
天上より八井の水が涌出むとあり。八ハ弥と。水の弥涌
は涌出る井の義也。○此遠持天天都水止所聞食止事依奉
支ハ。其涌出たる井水。やがて天津水とをば。此を御膳水と
聞食せと。事依一教給ふ也。○所聞食由庭乃瑞穂遠。由庭ハ
瑞穂也。上よ云。は天神の事依一奉給へ。天津水
を以。汁も實も和了聞食む。齋庭の瑞穂を云々と云事
あり。上よ千秋乃五百秋ハ瑞穂遠平安久由庭ハ所聞食

云々とある。對へる也。○四國ト部ハ。大被の下よ云。
○太兆乃ト事遠持或奉仕。太兆のト事ハ。龍田祭の下よ云
。古のハ齋郡ト定のト事ハ仕奉るあり。○悠紀ハ近江國
野洲主基ハ丹波國氷上遠齋定也。悠紀ハ齋定めたる國の
義也。由久ルを。久ルを伎と約めしあり。主基ハ。此
御政ハ充給ふ二國とも。齋國ハ有せし。其第一トト
出たる國也。由伎と名を專負せる。其次ハ出たる國を。
次の義を以。須伎とハ云あり。悠紀ハ齋城主基ハ清
城也。域と。一構の地と。家屋と。言ふ。城
塞ふとを伎とのみ云が如しと或人ハ云。此方あり。
さて近江國云々。丹波國云々ハ。康治元年ト食る國郡也。
○物部乃人等ハ。齋場の雜色人を云る也。物の部領を云る。

○祝詞正解下

よ。武職を以て仕奉る人とは異なる。物部之八十伴緒と云物部も同じ。○酒造兒ハ。式ニ。以當郡少領、女未嫁ト食者、充之ト何。字の如く酒造兒もれども。物部の人等の統領も。何事も此酒造兒を必ず先立る也。○酒波ハ。波ハ並の借字。酒並あるべし。酒造兒ハ相次ぎ並びる。事を行ふ職ある。○粉走ハ。式ニ篩粉とあり。古く粉を篩ふ事を走るとも云ふ。此ハ御酒に入ると灰を篩ふ職もあるべし。又藥灰のみも。粟の殻を去たるを篩をて殻を走らる。米とち。あとの事は仕奉るるべし。○灰焼ハ。式ニ凡造酒司、酒部一人、率焼灰一人、馳使五人、入ト食山、先祭山、神焼得藥灰一斛と見え。黑白二酒は混和料の灰を焼職あり。○新採ハ。大嘗宮の御寵より

用る薪を採るるべし。○相作ハ共作と云意。酒波ととも造酒兒を輔相。共ニ仕奉るる。○稻實公ハ。御飯の事ニ仕奉るる。○大嘗會乃齋場ハ。天照大御神の大命を。事依奉らせ給ふ。天津日嗣の瑞穂を。万千秋の長秋ニ聞食始させ給ふ。大嘗宮の齋場あり。○持齋利參來ハ。齋郡より在京齋場へ運び。其より大嘗宮齋場。持參來る事を合せて云ふ。齋利ハ。祈年祭の下ニ云ふ。○由志理伊都志理ハ。齋實嚴實。上ニ大嘗會乃齋場仁持齋利參來とある物実。下文ニ所謂悠紀主基乃黒木白木乃大御酒と。天津御膳との事ある。其ハ辰日の宴會。天皇命の聞食。直會の所。此ハ重復れるを省きて。其物名ハ下ニ讓せらる。志理ハ。神壽。神

乃礼^イ自^ジ利^リの自利^イは同^ト。○持^チ忍^ニ美^ミ持^チハ上^ノ持^チ齋^シ利^リ参^マ來^キ也^{ナリ}
の持^チは同^トトくる。齋^シ郡^ノより仕^シ奉^ルる物^{モノ}實^シを持^チ擎^グるを云^フふれ
を。常^ニは輕^クく添^ス云^フとい違^タひる。其^ノ意^ハ甚^シ重^シ。○清^キ麻^マ波^ハ利^リハ祈^ヒ
年^ニ祭^ヒの下^ニ云^フ。おる上^ノの齋^シ實^シ嚴^シ實^シの物^{モノ}實^シを云^フ。○月^ノ
内^ニ仁^ニ日^ノ時^ノ速^ク撰^ル定^ム也^{ナリ}。上^ノの太^タ兆^シ乃^チト事^ノ速^ク持^チ也^{ナリ}奉^ル仕^シよる應^ズ
る。今^ノ年^ノ十^ノ一^ノ月^ノ中^ノ都^ノ卯^ノ日^ノ仁^ニ云^フ々^トある是^ヲを云^フ。其^ノ前^ニ云^フ
べき所^ニあるを。今^ノ悠^キ紀^ノ主^ノ基^ノの大^ノ嘗^ノの供^ノ物^ヲを献^ルるを云^フハ卯^ノ
日^ノあり。其^ノ献^ルる迄^ノの間^ニ此^ノ事^ハ。悉^クくは時^ノ日^ヲをト定^メて仕^シ奉^ル
せざるを云^フ。其^ノ事^ヲを合^セる。此^ハ此^ノ言^ヲを置^クる也^{ナリ}。○悠^キ紀^ノ主^ノ
基^ノ乃^チハ。あゝる悠^キ紀^ノ主^ノ基^ノの國^ノのと云^フむが如^シ。○黒^ク木^ノ白^ク木^ノ
乃^チ大^ノ御^ノ酒^ノ。木^ノハ酒^ノの借^ノ字^{ナリ}。あハ色^ノの黒^クきと白^クきと二^ノ種^ノ
の酒^{ナリ}あり。上^ノ代^ノの酒^ノの名^{ナリ}あり。其^ノ造^ル法^ハ。灰^ハ燒^クと。藥^ノ灰^ヲを燒^ク

く役^ノ人^ノ有^ル。山^ニ入^テ燒^ケ得^タるを。白^ク酒^ハを云^フ。黒^ク酒^ハを云^フ
るとは二^ノ種^ノの藥^ノ灰^{ナリ}あるを。各^ノ其^ノを和^スる。其^ノ色^ハ白^ク
黒^クと。あると云^フべし。○天^ノ都^ノ御^ノ膳^ノ乃^チハ。天^ノ神^ノの
事^ヲ依^テ奉^ル給^ヘる。物^ヲを云^フ。此^ノ國^ノ土^ニ成^セる物^{ナリ}あり
が故^ニ。天^ノ都^ノ御^ノ膳^ノと聞^ク食^トと申^ス義^{ナリ}。同^ト續^ケるを云^フ
也^{ナリ}。遠^ク御^ノ膳^ノ止^トある止^ト。辞^ヲ究^メる重^クく。天津^ノ御^ノ膳^ノ止^ト為^ス
と云^フ程^ノの意^{ナリ}。上^ノある天^ノ都^ノ水^止所^ノ聞^ク食^トと見^エる。同^ト
ト云^フ程^ノの意^{ナリ}。○長^ク御^ノ膳^ノ乃^チ遠^ク御^ノ膳^ノハ。祈^ヒ年^ニ祭^ヒの下^ニ云^フ。○
汁^ハ實^シ汁^トハ。悠^キ紀^ノ主^ノ基^ノの黒^ク白^クの大^ノ御^ノ酒^ヲを指^シ。實^シハ。
稻^ノ實^{ナリ}。○赤^ク丹^ノ乃^チ穗^ノ仁^ノ所^ノ聞^ク食^トハ。祈^ヒ年^ニ祭^ヒの下^ニ云^フ。さて毛^ヲ
ハ輕^ク見^ルべし。○豊^キ明^ノ仁^ノ明^ノ御^ノ坐^ハ。大^ノ嘗^ノ祭^ヒの下^ニ云^フ。さ

てある。下と與天地日月共照志明良御坐事仁とあるべ
應く文ある。○天都神乃壽詞遂稱辞定奉ハ。上と云。○皇
神等母ハ。悠紀主基の齋場と迎参らせらる。天皇の大御
自大御手以て。朝夕の大御饌を供奉らせ給ふ。伊勢大神宮
を始め奉る。此祭は預り給ふ神等を申す。○千秋五百秋乃
相嘗。上と千秋乃五百秋仁とあるに照應へる也。相嘗の相
ハ。相共と云意より。大嘗宮ハ。皇大御神等を主と招請奉坐
す。其相嘗ハ。天地の間ハ御功德尊崇き皇神等をも。普給く
ませ奉る。大御膳奉り給ふを申すあり。○相守豆乃此奉
ハ大嘗祭の下と云。あくハ上の豊明仁明御坐止と。下の
與天地日月共云々ハ亘る語あり。○堅磐常磐仁齋奉利伊
賀志御世仁榮志奉利ハ。祈年祭の下と云。さる此より。其

事依り給へる天都神の壽詞の結びあり。○康治元年ハ。述
衛院天皇の御世、號ある。何よりハ大嘗祭行ハる。年號ハ
換給ふ也。○與天地日月共照志明良御坐事仁。明良里
より。豊明仁明御坐より受る。天地日月と共ハ。長御膳の遠
御膳と。天神の事依り奉給へり。天津日嗣の瑞穂を。齋場
に聞食御在り坐む事を申せあり。○本末不傾。本とハ。皇
神等より。末とハ。皇御孫命を申す。其皇神等の事依り奉り
給へり。壽詞を以て。今の大嘗の大御政の事實と令せり。
天神の壽詞を。稱辞竟定奉り。皇神の大御命より。皇御孫
命の大御業より。露違ふ事無く。御中執持り仕奉る云あり。
○茂槍乃中執持ハ。皇神と皇御孫命との。御中を執持り。祭
主と成る。大嘗を始め。凡々の神事ハ仕奉るが故。中臣

ハ。俗ハ云フ亭主役の如き者あるを。茂槍イカサとる如く中を執握る。本末を傾ざる由あり。○奉仕留中臣ハ。姓氏の中臣を云フ。非ズ。大被詞の大中臣と同ト。○祭主。伊波布イハフトハ。諸汚穢事を忌諱イミヒ避サる。カツを嚴シりて。慎シと仕奉るを云フ。主ヌトハ。人ノ多ク仕奉る中ニ。其長トありて仕奉るを云フ也。○正四位上云々ハ。康治元年ニ祭主たリ官位姓名あり此も其時時ニ替る也。○又申久ハ。上ニ天皇ニ奏上る詞ハ終ニ多クバ。此ヨ其御前ニ侍マらふ人ニ宣る辞あり。○天皇朝庭ニ奉仕留ハ。常に朝廷ニ仕奉る臣下ト云フトハ。輕クて。此大嘗會を行ハるニ就ス。其行事ニ預ル。御許ニ仕奉ると云フ意味あり。○親王等王等諸臣百官人等ハ。恒ツ云フトハ。異ニあり。豊明トヨアキの宴を賜ハる限を云フ。○天下四方國乃百姓

諸々ハ。別ニ百姓を宴ス召スるニよテハ無セども。悠紀主基に仕奉る。國郡司以下雜色人ハ更ニあり。常ニ國々ヨり在京ニ仕奉る官人及諸司の下司ヨも召スせて仕奉る良民モも合セて。廣ク云フあり。○見食倍尊食倍見食倍尊食倍歡食倍見食倍尊食倍給ヘト云フ。詞あり。見給ハ。大嘗齋場ニ持齋ニ參來て云々。持恐ミみル。清ヤまりニ仕奉云々あり。を云フ。尊給ハ。皇御孫命の大嘗聞食ニ元由ニあり。歡給ハ。事の取具ヲたるを歡ムべシるあり。聞給ハ。天皇ニ奏スる壽詞を。百官ヨも宣聞ユせシあり。○茂世ニ八桑枝乃立榮ハ。春日祭の下ニ云フ。○禱乎所聞食ハ。親王以下の人々ニ。天神壽詞を聞給ヘト也。恐美々々ハ。辞別ハの文ヲながら。天神壽詞ニ引續クけテ。天皇の大御前ニ申ス故ニ。深ク恐ミるニ申ス也。

○此一章の意ハ。明つ御神と大八島國を知食も。天皇命の大御前よ。天神の壽詞を稱辞定奉ると申も。高天原に坐々を。天皇の御祖神たる二柱の大神の詔命を以て。數多き至極の神等を集め給ひて。皇御孫尊ハ。高天原よ事始め給ひて。豊葦原の瑞穂の國を安國と平けく知し食て。天つ高御座よ御坐まゝして。天神の事依し給ひし大御膳を。弥遠長よ平けく安けく。大嘗宮の齋場よ知し食せと事依し奉りて。天降坐々し後よ。中臣比遠祖天兒屋根命。皇御孫命の大御前よ仕奉りて。已命の御子。天忍雲根神を。二柱の御祖の大神の御前よ。皇御孫命の御膳つ水よ仕奉らむ水を。受賜をら令給ひし。天よ二上比山よ。立奉り上げて。皇御孫命の大御膳よ仕奉る水ハ。現し國の水の上よ。天水を加へて奉

むららに。天津水を授賜へと。申せと事教へ給ひし依て。天忍雲根神。浮雲よ乘て天の二上よ上まゝして。父神の教への任よ。御祖の神等よ申せば。御祖の神等。天の玉串を。皇御孫命よ依し奉り。忍雲根神よ教へ給ひし。此玉串を土よ刺立て。夕日の降より次の日の朝日の昇るまで。天津詔詞比太詔詞を以て宣せ。如此く宣ハ。正午時よ皇前まで待たむ。其處よ清淨き五百篁生出む。其化出たる篁の下より。水の弥涌よ涌出る井出む。其井の水よあて。天津水もせバ。此を御膳水と聞食せと事依し教へ奉り。如此く依し奉りし任よ。聞食を齋庭の瑞穂を。四國のト部等齋郡ト定の太兆のト事よ仕奉りて。悠紀主基の國郡を齋ひ定め。齋場の雜色人等ハ。酒造る人。其を助くる人。御酒よ入る。灰を篩ひ

又粟の殻を去たるを篩ひ今る人。黑白御酒を混和する料の灰を焼く人。薪を採る人。酒並と共に造酒兒を輔くる人。御飯の事は仕奉る人等。大嘗祭の齋場は持運び齋清めり。参り来り。今年の十一月の中つ卯日。齋實嚴實恐る清め仕奉る。月の内は吉日良辰を撰び定めり。献る悠紀主基の國の黑白は、大御酒を。天皇命が天神の依り給ひ大御膳と。御酒御飯を大御顔の麗ハしく赤らみ坐る。聞食る。豊明も赤らみ坐る。天津神の壽詞を稱辞定奉る。尊き神等も。千秋五百秋の相嘗に諾令納受り給ひる。堅磐の如く常磐の如く凶事を忌避り善らりめり。威も足り勢も嚴る御世は榮りめ奉る。今年より始めり。天地月日と共に長く遠く。天神の事依り奉給へり。天津日嗣の瑞穂を。齋場は聞食

御在り坐む事。皇神の大御命も皇御孫命の大御業も。露違ふ事無く。茂槍とる如く。御中を執持る。仕奉る中執。臣。祭主官位姓名。壽詞を稱辞定奉ると申る。又申る。今日の大嘗祭は仕奉る。親王等王等諸臣百官人等。天下四方國の百姓諸。集り侍り。齋たり清り。仕奉る状を見給へ。皇御孫命の大嘗聞食を元の由縁を尊給へ。事の取具とるを。歡び給へ。天皇命は奏る壽詞を聞給ひる。天皇朝廷は嚴めり。き御せり。弥木榮の如く立榮え仕奉るべき壽詞を聞給へ。恐みこも申さるあり。

祝詞正解下之卷終

明治十七年一月廿一日版權免許
同 年二月廿九日刻成發兌

定價金四十五錢

注解人

千葉縣士族
住吉神社祢宜

青柳高勲

大坂府摂津國住吉郡
住吉村百四十四番地

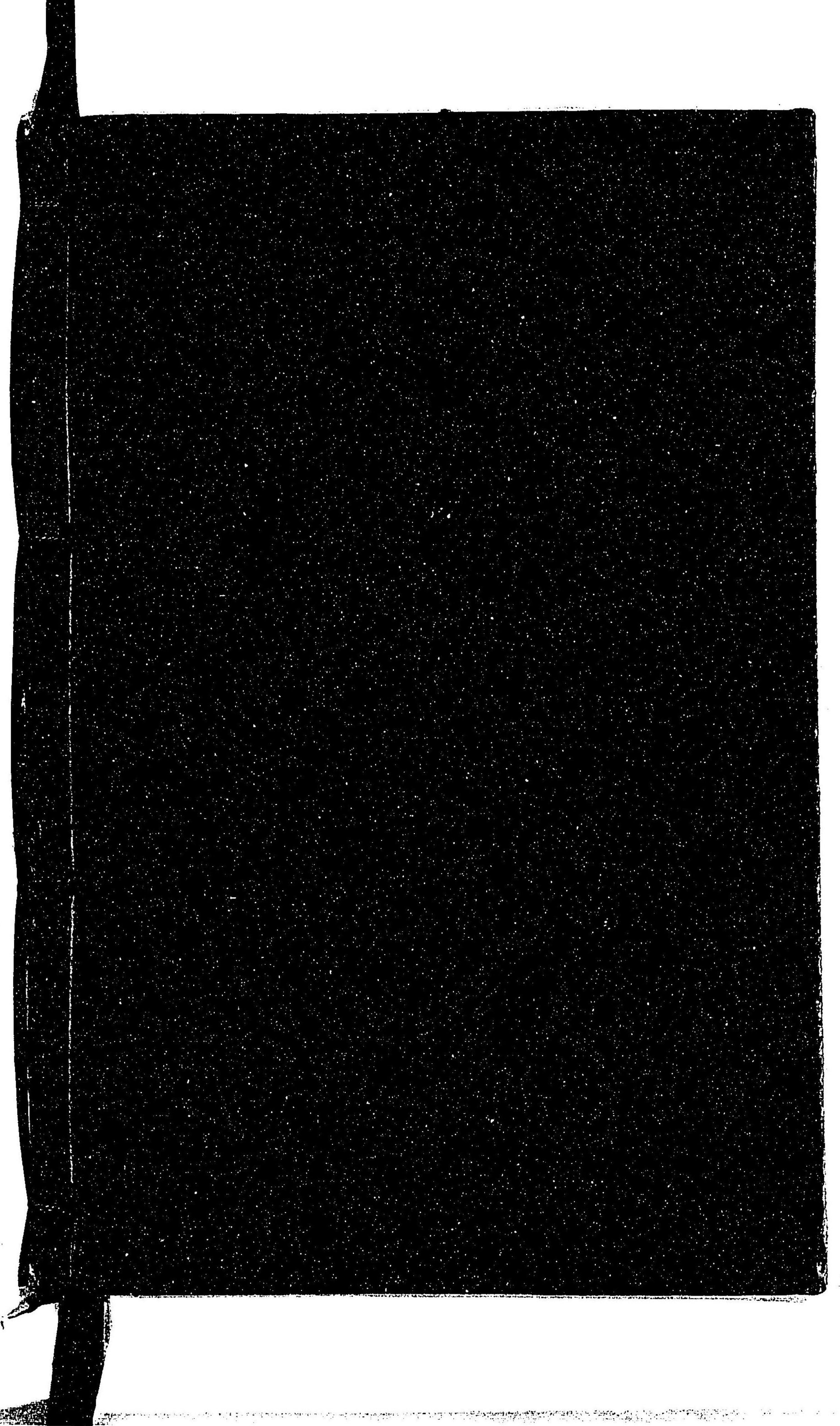
出版人

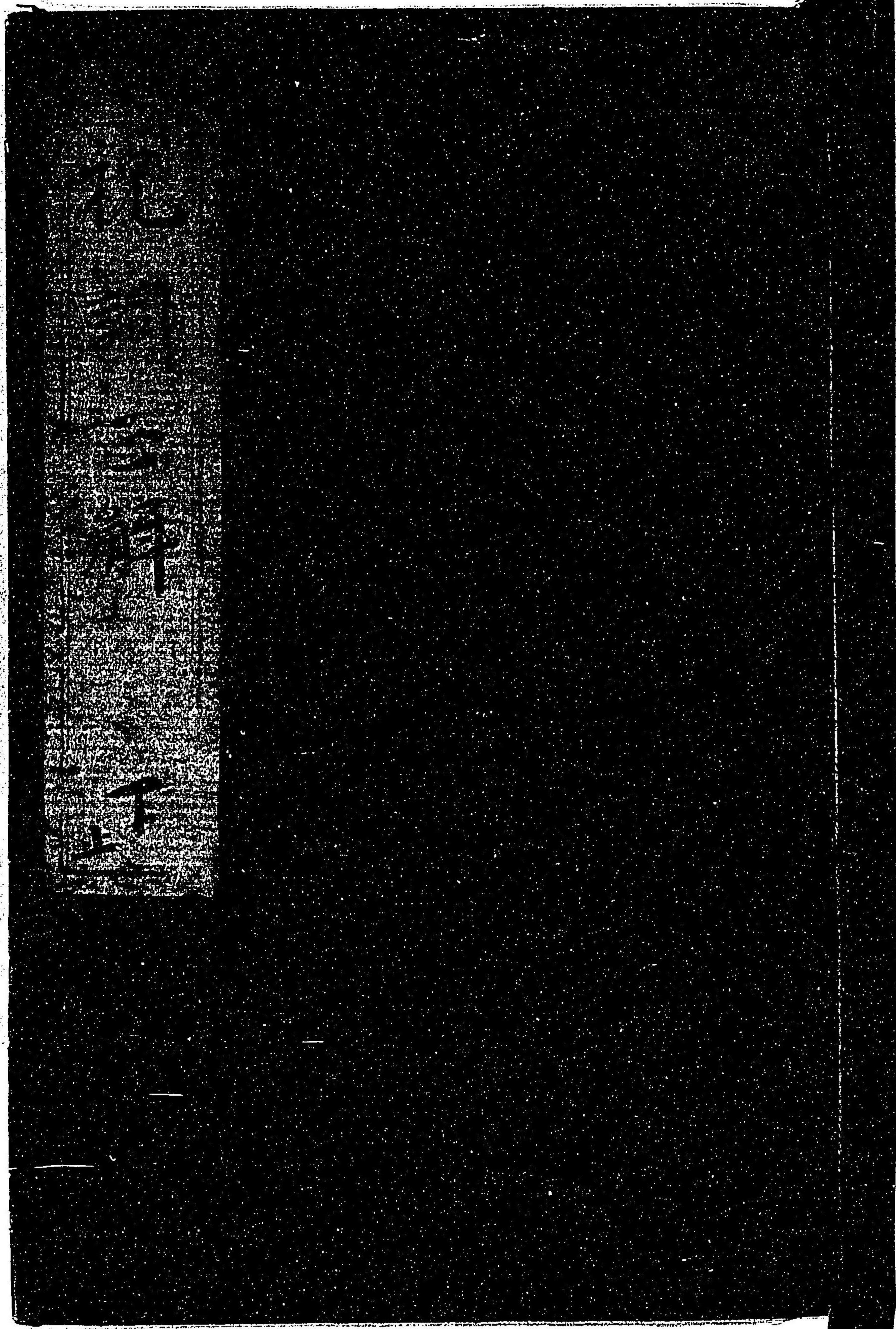
京都府平民

池村久兵衛

京都上京區第廿八組
町頭町廿八番戶

7
3
4





心經子